調査年報 2

平成元年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

調査年報 2

平成元年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

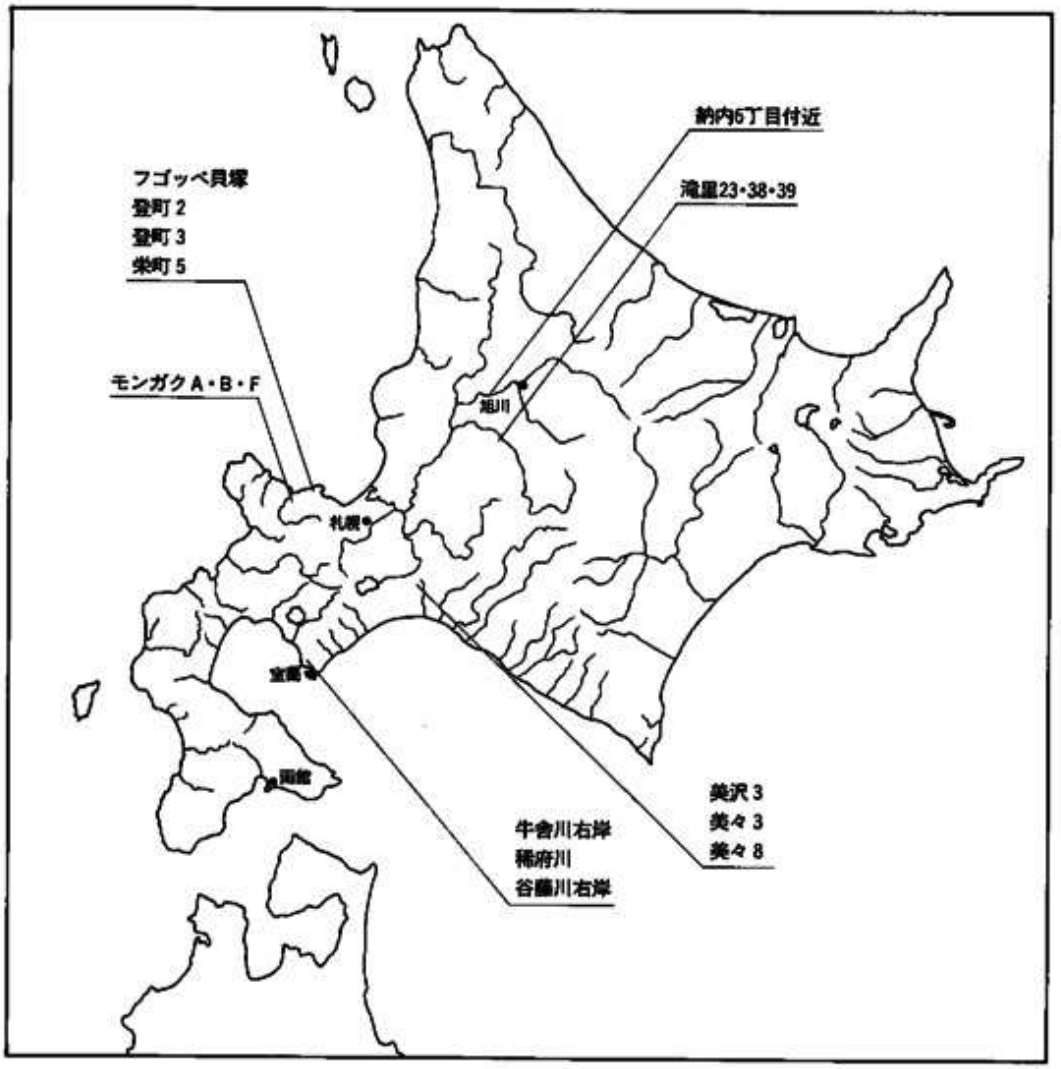
目　　次

Ⅰ．平成元年度の調査
1．調査の概要 …… 1
2．調査遺跡 …… 3
美沢３遺跡 …… 3
美々３遺跡 …… 7
美々８遺跡 …… 11
滝里23・38・39遺跡 …… 15
納内６丁目付近遺跡 …… 19
牛舎川右岸遺跡・稀府川遺跡 …… 23
谷藤川右岸遺跡 …… 27
フゴッペ貝塚 …… 29
登町２遺跡 …… 37
登町３遺跡 …… 41
3．研修・研究会等 …… 45
4．刊行報告書 …… 47
5．組織と機構 …… 48
Ⅱ．設立10周年記念事業
1．概　　要 …… 49
2．記念講演要旨 …… 50

凡　例

1）「Ⅰ．2．調査遺跡」で遺跡名の後に付した（　）内は、道教委文化課の埋蔵文化財包蔵地登載番号である。

2）各遺跡の位置図は、それぞれ国土地理院発行の２万５千分の１あるいは５万分の１図を複製または縮小利用したものである。



平成元年度調査遺跡の位置

Ⅰ．平成元年度の調査

1．調 査 の 概 要

本年度の調査は発掘調査が14遺跡67,470 m²、事前発掘調査（試掘調査）が２遺跡663 m² で調査面積の合計は68,133 m² である。このほか、整理作業のみ実施した遺跡が４遺跡ある。

次にこれらの遺跡の発掘調査について年代順に概観してみると、旧石器時代の資料は、美沢３遺跡からフレイク・炭化木片などが支笏軽石流堆積物上のローム質土層から出土している。約１万８千年前の石刃文化以前の石器と思われる。

縄文時代早期の資料は納内６丁目付近、美沢３、谷藤川右岸遺跡から発見されている。納内６丁目付近遺跡から中茶路式・東釧路Ⅳ式期の住居跡が18軒（昨年度分を含めると31軒）と、かなりまとまった状態で発見されたほか、下層の礫層から撚糸文、組紐圧痕文などを持つ土器片が出土している。この種の資料がかなり充実した。美沢３遺跡では東釧路Ⅳ式期の住居跡が環状に発見されたほか、一部に土盛り遺構も認められた。谷藤川右岸遺跡から小量ではあるがコッタロ、中茶路式期の土器が出土している。

中期の資料はフゴッペ貝塚、登町２・３、美々３、牛舎川右岸、谷藤川右岸、滝里39遺跡などから出土している。フゴッペ貝塚からは中期末葉の住居跡の覆土に貝層が存在し、この中から魚骨、海獣骨などの自然遺物のほか、銛、釣針などの骨角器が検出されている。また、低位段丘面から前期末葉から中期初頭の円筒土器系統（最近道央部で出土するようになった新型式）を主体とした土器及び大形の石皿、台石など約130万点の遺物が出土している。滝里39、納内６丁目付近、美々８遺跡からＴピット群が発見されている。このうち、納内６丁目付近遺跡は埋没小河川の段丘縁に沿って、美々８遺跡は段丘縁に沿って列をなしてみとめられた。

後期は稀府川遺跡から堂林式期の住居跡が２軒、美沢３遺跡から手稲式期の住居跡が２軒（昭和51年のものを含めると５軒）発見されている。

晩期は美々８遺跡から昭和62年発見のものに続いて道跡が発見されている。美沢３およびフゴッペ貝塚から、この時期にはよく見られるピットが数十個まとまって発見されている。

擦文時代は美々８遺跡の美沢川左岸の台地から、７世紀～９世紀頃の擦文土器、土玉、金属器などとともに小柱穴、焼土が出土している。祭祀的な遺構を思わせる。

中近世の資料は美々８遺跡の美沢川左岸の湾入した地形２ヵ所から発見されている。そのうちの１ヵ所は低地から斜面にかけての部分で、15世紀中葉から18世紀初頭にかけての道跡（昭和56年のものに続く）、建物跡、杭跡とともに、鉄器、珠州系陶器、古銭などが発見されている。他の１ヵ所はこれより170 m ほど下流で、低地部分から４間×６間の建物跡と推定される柱穴列が発見されている。これは幕末期の探検家松浦武四郎が記した千歳越、勇払越に関連するビビ小休所に相当する建物と思われるが、来年度以降に調査が予定されている斜面に、道跡などが発見されれば、その可能性はより高くなる。

平成元年度調査一覧

遺跡名	所在地	調査面積 (m²)	関連工事名 / 調査委託者	備考
美沢 3	苫小牧市	5,478	新千歳空港建設事業	昭和51、53、63年度調査
美々 3	千歳市	6,000		昭和61年度調査
美々 8	〃	4,182	北海道開発局(札幌)	昭和56、57、60、62年度調査
滝里 23	芦別市	1,400	滝里ダム建設事業	平成元年度新規調査
滝里 38	〃	900		〃 ・来年度継続
滝里 39	〃	3,600	北海道開発局(石狩)	〃
納内 6丁目付近	深川市	4,784		昭和62、63年度調査
牛舎川右岸	伊達市	21,523	北海道縦貫自動車道	平成元年度新規調査・来年度継続
稀府川 (牛舎川左岸)	〃	8,977		〃 ・ 〃
谷藤川右岸	〃	1,813	日本道路公団(札幌)	〃
牛舎川右岸・稀府川	〃	663		事前発掘調査
フゴッペ貝塚	余市町	5,833		平成元年度新規調査 来年度整理作業継続
登町 2	〃	1,860	広域営農団地農道整備	平成元年度新規調査
登町 3	〃	1,120		〃
栄町 5	〃	—		昭和63年度調査・整理作業
モンガクA	仁木町	—		〃 ・ 〃
モンガクB	〃	—	北海道後志支庁	〃 ・ 〃
モンガクF	〃	—		〃 ・ 〃
計		68,133		

2．調 査 遺 跡

美沢３遺跡 （J－02－81）

事 業 名：新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局札幌開発建設部

所 在 地：苫小牧市美沢164番地ほか

調査面積：5,478 m²

発掘期間：平成元年５月８日～10月23日

調 査 員：大沼忠春、遠藤香澄、田口　尚、越田雅司

遺跡の概要

美沢３遺跡は、美沢川の右岸にあり、新千歳空港の建設用地内では、対岸の美々８遺跡とともに、美沢川の最下流部に位置し、千歳から苫小牧に通ずる国道36号線からは、美沢川に沿って1.5 km ほど上流に位置している。美沢川に臨む低位段丘から背後の斜面、さらに台地上部にかけて遺跡の広がりが認められている。今年度は、昨年度に斜面を中心に調査したのに続き、低位段丘と、斜面上部から台地上にかかる位置３ヵ所、合わせて４ヵ所の地区を調査した。

上流側から、ｂ－70、ｃ－68、ｄ－70、ｆ－71の各地区付近となる。

Ａ．ｂ－70区付近は、台地上から斜面にかかる位置にあたり、西側が特に急傾斜をなしていた。この急斜面に円形プランのピットが13個発見された。台地上部には東釧路Ⅳ式土器が散点的に認められている。この地区では第Ⅱ黒色土層の調査後、支笏軽石流堆積物上のローム質土層の調査を実施し、炭化木片とともにフレイクなどが発掘された。

Ｂ．ｃ－68区はほぼ平坦な低位段丘面で、昨年度に第Ⅰ黒色土層の調査を行った際、南側に円形のくぼみがあり、北側には高まりのあることが知られた。今年度の調査によって、南側のくぼみは縄文時代後期の竪穴住居跡のくぼみであり、北側の高まりは縄文時代早期に土盛りが行われていたためであることが判明した。第Ⅱ黒色土層の上面に近い位置には縄文時代後期の土器片があり、さらに掘り進むと同前期の遺物が出現した。盛土の下部からは、中茶路式土器が出土し、その頃の土壙墓も認められた。住居跡は段丘の縁辺に早期の比較的深い竪穴があり、平坦面には後期の浅い竪穴が認められた。この地区からは住居跡５、ピット31、小ピット２、焼土37などの遺構と土器、石器、土・石製品、自然遺物などが発掘されている。

遺 跡 の 位 置

C．d－70区付近は、幅の広い沢地形をなし、この沢を東西に横断する状態で発掘区が設定されていた。西側の斜面の高い位置に小型のTピットが3個、東側の斜面の低い位置に細長いTピットが1個発見された。これらは昨年度の調査地区のTピットと連なるものとみなされた。遺物は、東側斜面に中茶路式土器が多く見出され、沢底には縄文前期の中野式系統の土器が出土した。

D．f－71区は調査範囲の東端部のやや狭い沢を東西に横断する調査区で、西側斜面から沢底に及ぶ急斜面に位置し、昨年度調査したf－70区の南側に隣接している。遺構は認められないが、各時期に属する石鏃が多く出土し、西側斜面からは中茶路式土器がややまとまって出土した。

遺構と遺物

今年度の調査によって、美沢3遺跡の低位段丘から背後の斜面及び台地上に及ぶ、遺構、遺物の多く出土する、いわば遺跡の主要部分の調査を終了したので、昨年度の資料と合わせて、この遺跡における遺構、遺物のあり方をほぼ知り得ることとなった。昨年度注目された早期の住居跡、足形付土版の出土した墓、前期初頭の土器群のあり方、石刃鏃のあり方などに加えて、それらと関連した遺構や今年度の調査によって新たに出現した遺構として早期の盛土と晩期の土壙群がある。また、低位段丘の縁辺での遺構、遺物の出土状況から、川による浸食の進んでいることが推定された。時期ごとに概略を述べると次のようになる。

縄文時代の住居跡は、昨年度の調査結果と合わせると、早期末葉、中期前葉、後期前葉、後期中葉の4時期のものがあり、早期の住居は低位段丘面をとりまくように広範囲に弧状をなす状態で見出され、径50mほどの環状集落を構成していたことも考えられる。この住居跡群の内側に沿うように、遺物を多量に含む層が広がっている。盛土の位置は、いわば中央の北側に位置している。美沢川流域のこれまでの調査結果では、美々7遺跡の例とならびこの時期の住居跡群としては最もまとまりの良いものである。

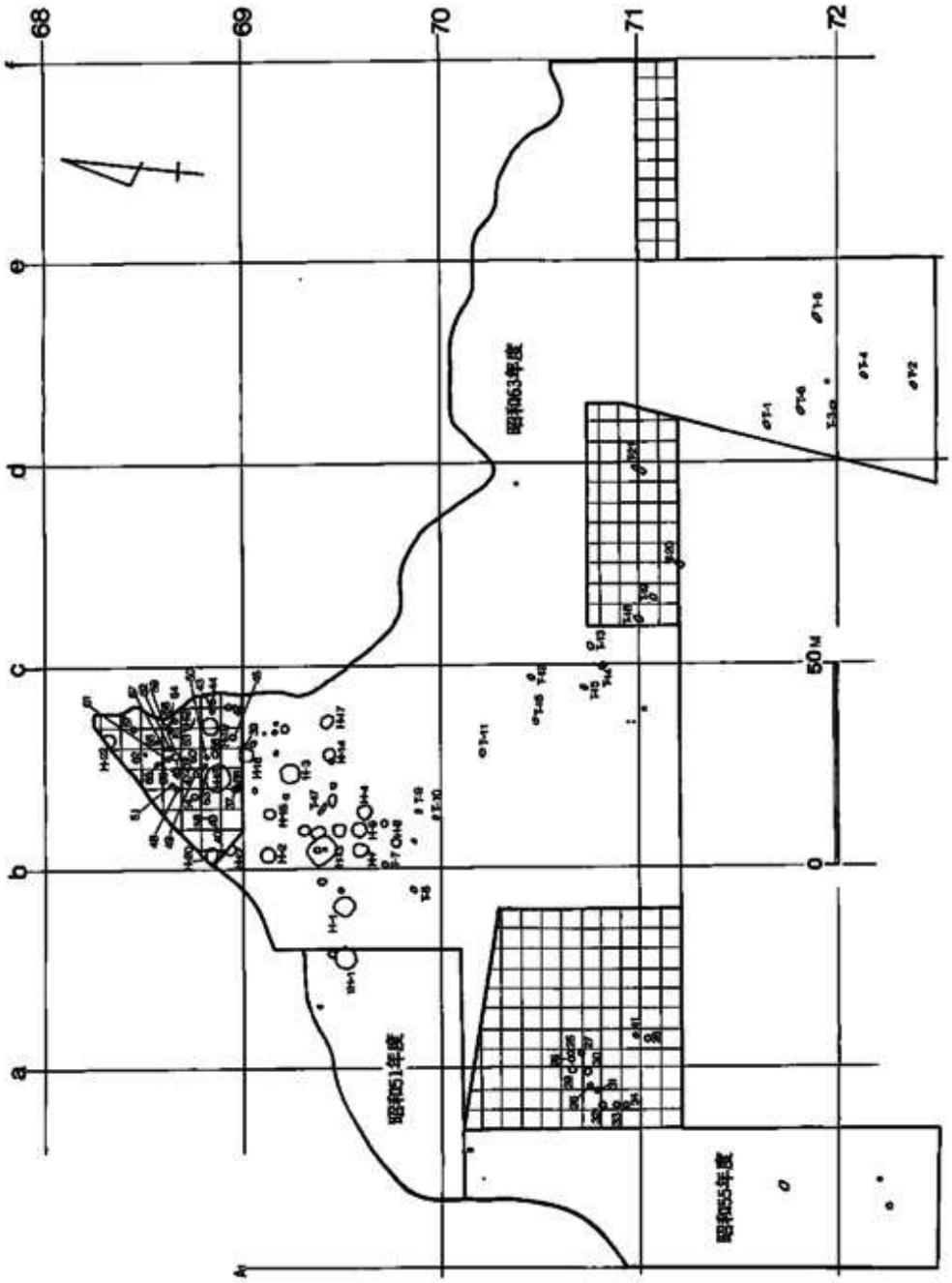
早期の土壙墓とみなされるものは、2基存在し、いずれも東釧路Ⅳ式の包含層の下に見出され、中茶路式の時期のものと推定された。1基は大型のもので、壙底にベンガラが認められている(P－56)。美沢川流域のこれまでの調査結果では最古段階のものとみなされ、当時の墓に規模の大小、副葬品の有無、種類に差のあることが知られる。

縄文前期の遺物には、昨年の出土資料と接合するものや、新たな資料が追加され、前期最初頭の状況を示す資料が一段と充実することとなった。この時期の遺構にはピットがある。

縄文中期の資料は散点的に土器片が出土したのみで、遺構はない。

縄文後期の資料には前葉から中葉のものが多く、住居跡も51年の調査例を加えると5軒となる。後期前葉のものも2軒認められることとなった。

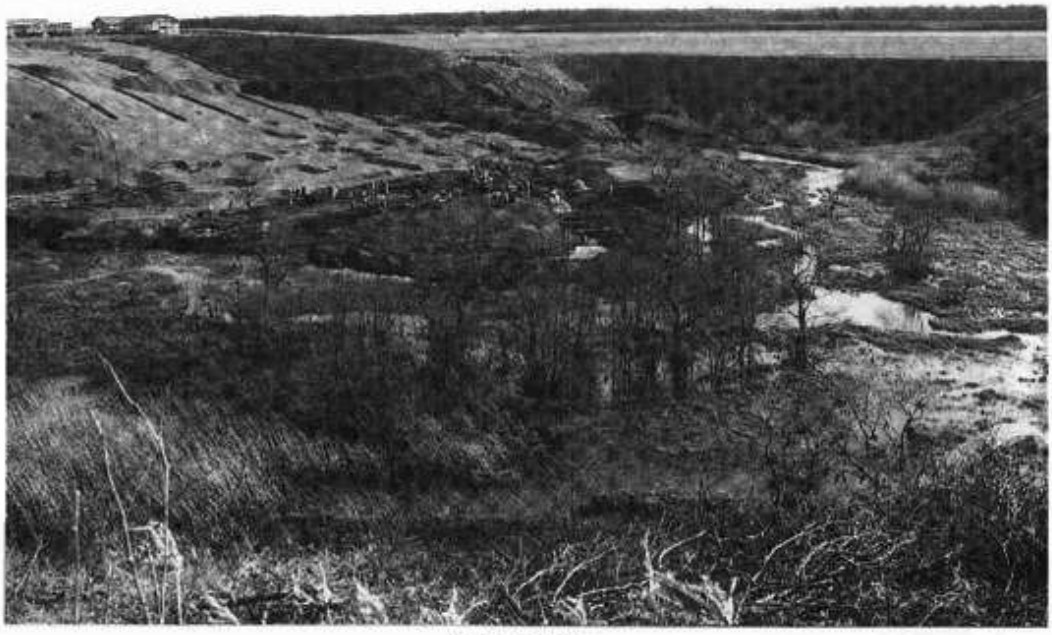
なお石刃鏃に関する追加資料の出土することを期待したのであるが、全く出土しなかった。石刃鏃の所属時期は、第Ⅲ黒色土層に包含層は存在していないのでTa－d層上に遺されたものと判断された。



美沢３遺跡遺構位置図

旧石器時代遺物出土状況

縄文時代早期の土壙墓



美沢３遺跡遠景

美々３遺跡　（A－03－98）

事 業 名：新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局札幌開発建設部

所 在 地：千歳市美々988-25ほか

調査面積：6,000 m²

発掘期間：平成元年５月８日～10月28日

調 査 員：大沼忠春、佐藤和雄、田口　尚、越田雅司

遺跡の概要

美々３遺跡は美沢川左岸台地上に位置している。東側は、美々４遺跡で、昭和59・60年度に調査されていて、連続した遺跡を形成している。美々４遺跡では第Ⅰ黒色土層と第Ⅱ黒色土層の２層の遺物包含層が認められ、それとの関連で、美々３遺跡にも２層の遺物包含層の存在することが考えられた。ただし、美々３遺跡の第Ⅰ黒色土層中の包含層の広がりは川に沿う部分のみとみなされていた。昭和61年に美々３遺跡の北側を調査しているが、その際には第Ⅱ黒色土層のみ調査を行っている。今年度調査地区は第Ⅰ黒色土層中を全面調査した。

第Ⅱ黒色土層は1,500 m² ほどの調査を行ったが、これまでの美々３、美々４遺跡の調査からみて、北筒式を主体とする遺跡であることが予測され、遺構の出現はあまり期待できないと思われていた。しかしながら、予想に反して遺構の存在することが判明し、これまでの調査地区がむしろ遺跡の縁辺部であるとみられるようになった。遺物の量も格段に多い。

これまで美沢川の遺跡群においては、北筒式の時期の遺跡はあまりなく、この美々３遺跡は、むしろ空白に近かったこの時期の様相を埋めるもので、今年度の調査結果と、今後に残されている調査区の結果を合わせてその特色が示されることとなろう。また伴出する石器も比較的限定された時期のものとみることができる。

遺構と遺物

第Ⅱ黒色土層から発見した遺構には縄文時代中期の特徴的な住居跡が１軒と、大形の竪穴住居状の遺構及びピットが２カ所ある。H－２は平面が南北に長い卵形を呈し、第Ⅱ黒色土層上面から40～50 cm の深さをもつもので、長軸で5.9 m、短軸で4.6 m を測る。Ta－d_2 層を床面とし、中央部に３回作り直された炉跡があり、石で囲っている。南端に出入口を設けたかと想わせる掘り込みがある。床面には大小不規則に柱穴状のピットが認められ、壁外にも住居跡をとりまくように傾斜したピットが検出されている。炉と南端の掘り込みの間に浅い皿状のピッ

遺跡の位置

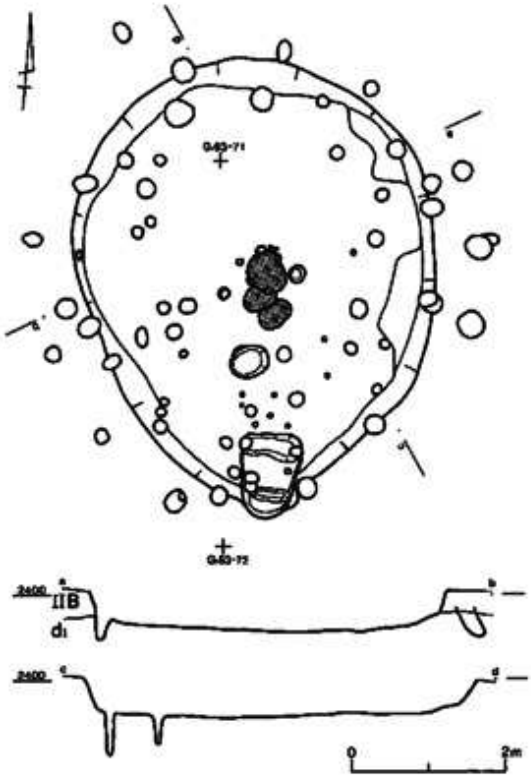
トがあり、下部に遺物を大量に含む混り土が認められる。この覆土に含まれる土器片は包含層と同様北筒式が多いけれども、余市式が若干認められている。

円形のやや大形のピットは、北筒式の時期の遺跡で間々認められるものであり、竪穴住居跡の遺構（H－1）も北筒式の時期の遺跡で認められるものである。これらとH－2とのかかわりは、まだ遺跡の主要部の調査が残されているので今後の検討課題ではあるけれども、表面からのくぼみの状態で、H－2の方が古く、H－1の方が新しいとみられること、H－2は従来、北筒式を伴う状態で発掘された例はないことなどが注意される。このH－2に示される特徴的な形態の住居跡は、ノダップII式や煉瓦台式を伴うものであって、ここでのあり方からみて、それらの、いわば道南系の文化をもつ人々によってこの住居が営まれ、その後に北筒式の文化をもつ人々がそれらを利用していたと考えられることも可能のようである。

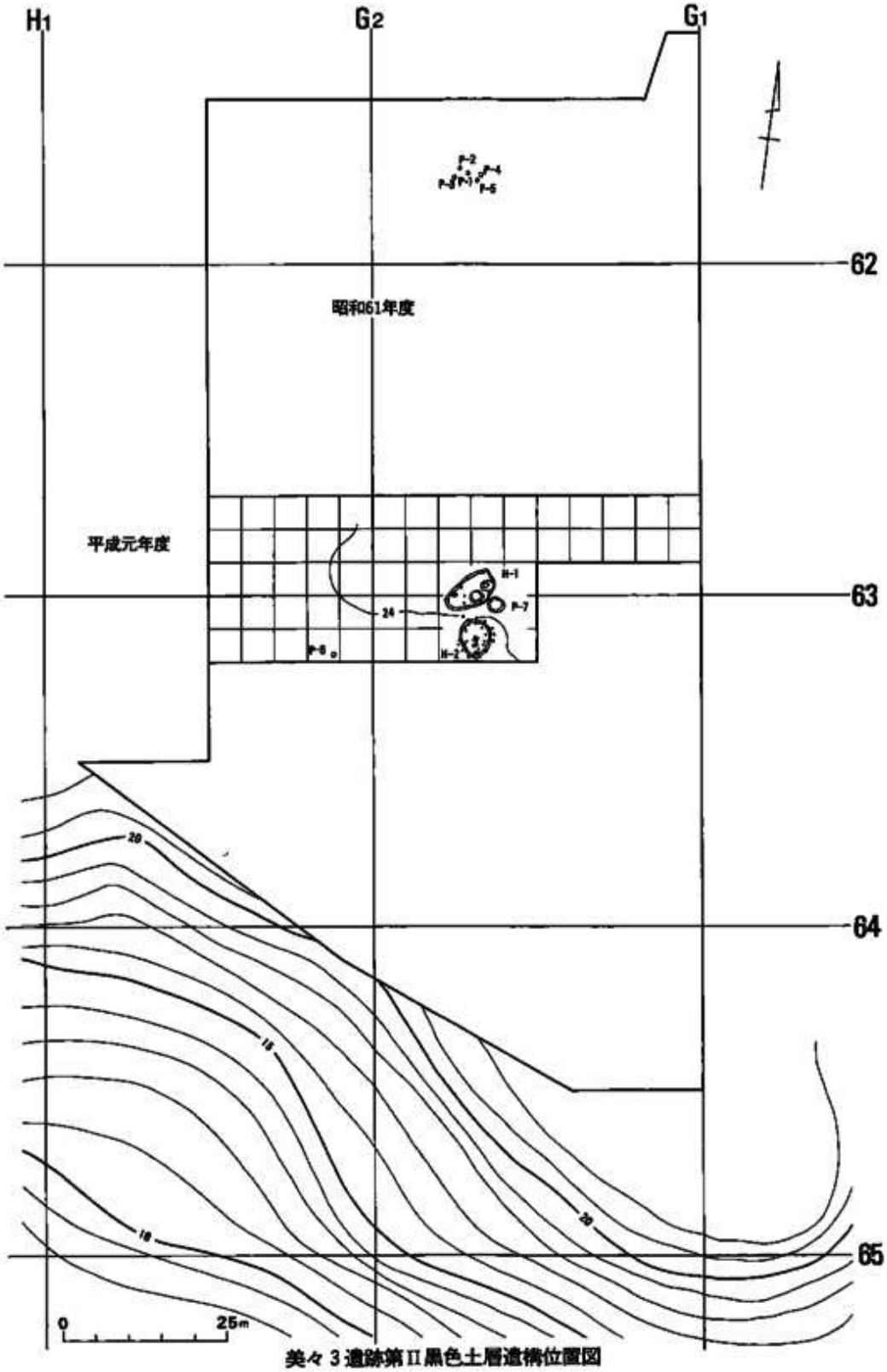
第II黒色土層の遺構はH－2の南側、東側により多く存在することが予想され、くぼみの状態が大型の円形プランを示すようにみえるものもあり、それらの中には余市式の住居跡の含まれる可能性はある。台地上部の広い平坦面にこの時期の遺構が認められた例は美々5にもあり、この時期の特色となるものかもしれない。

包含層出土の遺物には黒曜石の剝片、チップが多く、また石槍の破損品も多く出土していて、この場所で石槍を製作していたようである。さらに緑色、黒色の片岩の剝片も出土していて石斧の製作もなされたようである。石鏃は少ない。土器は北筒式が多く、前期の綱文式、中期の円筒上層式の破片がわずかに認められ、北筒式を伴うかどうか不明ながら、ノダップII式、煉瓦台式、余市式の破片が若干出土している。北筒式も子細に検討するといくつかのグループに区別しうるかとみられる。余市式にも道南型（天祐寺式）のものと在地型のものがありそうで検討課題である。他に後期、晩期の土器片もわずかに出土している。

第I黒色土層には遺構が認められず、晩期の土器片が各所に散在する状態であったが、黒曜石の大きな石核が出土している。土器の中にも完形に復元されたものがある。



美々3遺跡　H－2住居跡



美々３遺跡第Ⅱ黒色土層遺構位置図

美々３遺跡近景

縄文時代中期の住居跡

美々８遺跡　（A－03－94）

事 業 名：新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局札幌開発建設部

所 在 地：千歳市美々1292－133ほか

調査面積：4,182 m²

発掘期間：平成元年５月８日～10月28日

調 査 員：大沼忠春、佐藤和雄、田口　尚、越田雅司

遺跡の概要

美々８遺跡は美沢川の左岸、台地上から川に臨む斜面に形成された遺跡である。昭和50年の掘開調査による報告では、擦文時代の遺物を含む第Ⅰ黒色土層の下の第Ⅱ黒色土層から縄文時代早期の遺物が出土し、二枚の包含層のあることが知られた。他方、昭和41年７月に苫小牧市沼の端で丸木舟が発掘されて以来、古文献や古絵図にみられる「千歳越」「勇払越」が相当古くから存在したと考えられるようになり、昭和50年に出版された『苫小牧市史』では「勇払越え」、「幕末の交通」などの節を設け、この交通路について詳述されたのであった。千歳市側でも長見義三氏が『ちとせ地名散歩』を書かれ、この美々８遺跡が、古来ビビ（ビベンコ）として知られてきたその場所であることを述べられた。昭和56年の調査では表土層の遺物も報告され、この遺跡に三枚の文化層のあることが知られ、本年度も表土、第Ⅰ・Ⅱ黒色土の三層の調査を実施した。

遺構と遺物

第Ⅱ黒色土層に発見された遺構にはＴピット、焼土、道跡がある。Ｔピットはｂ・ｃ－66地区の台地の縁辺にそって６カ所、列をなすように認められた。昭和56年度に発見されたものに続くもののようである。焼土はｂ－66区に集中的に７カ所認められた。道跡はｆ－66区の第Ⅱ黒色土層上面で認められ、昭和62年度に調査された道跡に続くものとみられる。

出土遺物には縄文時代早期の土器、石器が散点的に認められた他、ｆ－66区の第Ⅱ黒色土層上面に近い位置で、晩期後葉の浅鉢形土器と石製垂飾が出土している。

第Ⅰ黒色土層に発見された遺構には、擦文時代に属するものと中・近世に属するものとがあり、ｆ・ｅ－65・66区では擦文時代のものとみられる焼土38カ所と小柱穴が82個認められている。またｆ－68区では６個と４個の方形をなす小柱穴が発見され、擦文土器片が

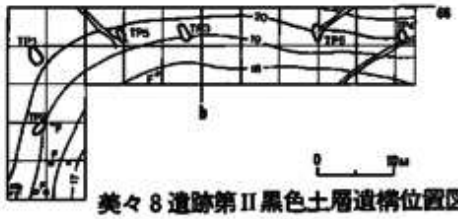
遺跡の位置

その付近から出土しているので、擦文時代の遺構とも考えられる。一方、b・c—66区では、斜面を下る道跡が、3～4条認められ、その内一条は、昭和56年に確認された道跡につながるものであった。斜面の下方には道のわきに住居跡かとみられる窪みがあり、また一面に小柱穴の密集している状態が観察された。焼土は道跡を中心に斜面一帯に35ヵ所認められている。この地区から出土した遺物には、珠洲系陶器、近世の磁器、硯、北宋銭、古寛永銭、刀の破片、鍋の破片、刀子、マレックのようなもの、鋤先など多くの金属器が出土している。総じて、中世から近世にかけての遺物が多く出土している。

e・f—65・66区から出土した遺物には続縄文時代の石器が少量ある他は、擦文時代の土器が多量に出土し、土玉、金属器、鉄滓などが伴うようである。黒曜石製のラウンドスクレイパー状の石器も認められている。土器の特色から、擦文時代の最初頭の時期、おそらく7世紀代から8・9世紀にかけてのものが主体をなすようである。昭和56・57・62の各年度に調査した資料と関連するもので、美々8遺跡のこれまで出土した擦文土器の中では最も古い段階が明らかになるものもみられる。なお金属器の中には中世に下るものがあるかもしれない。

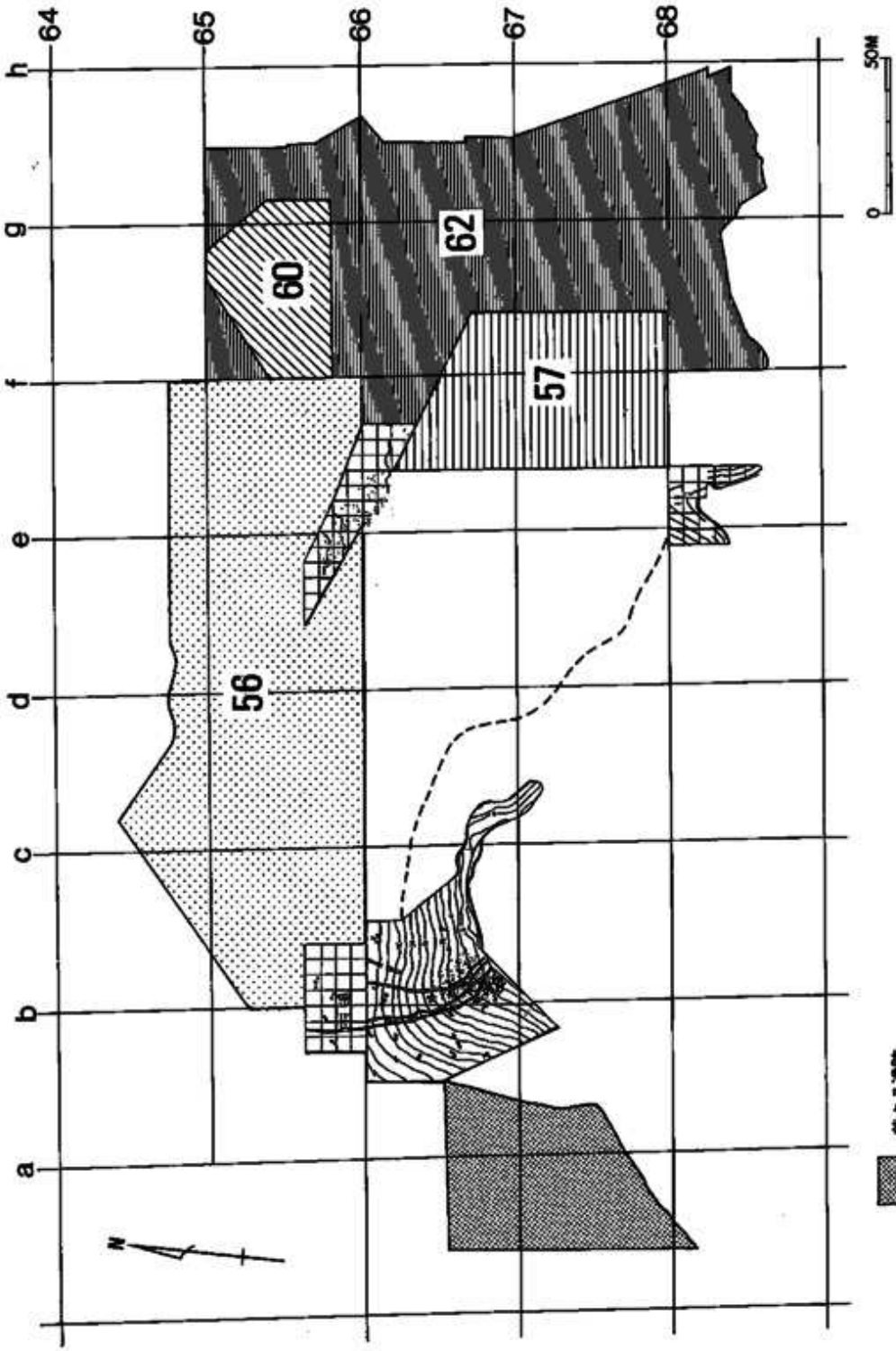
第Ⅰ黒色土層の遺構、遺物のあり方は、東側に擦文時代の遺物が多く、西側の沢には中近世の遺物が多い傾向があり、時代とともに利用される場所が変わってきたものであろう。

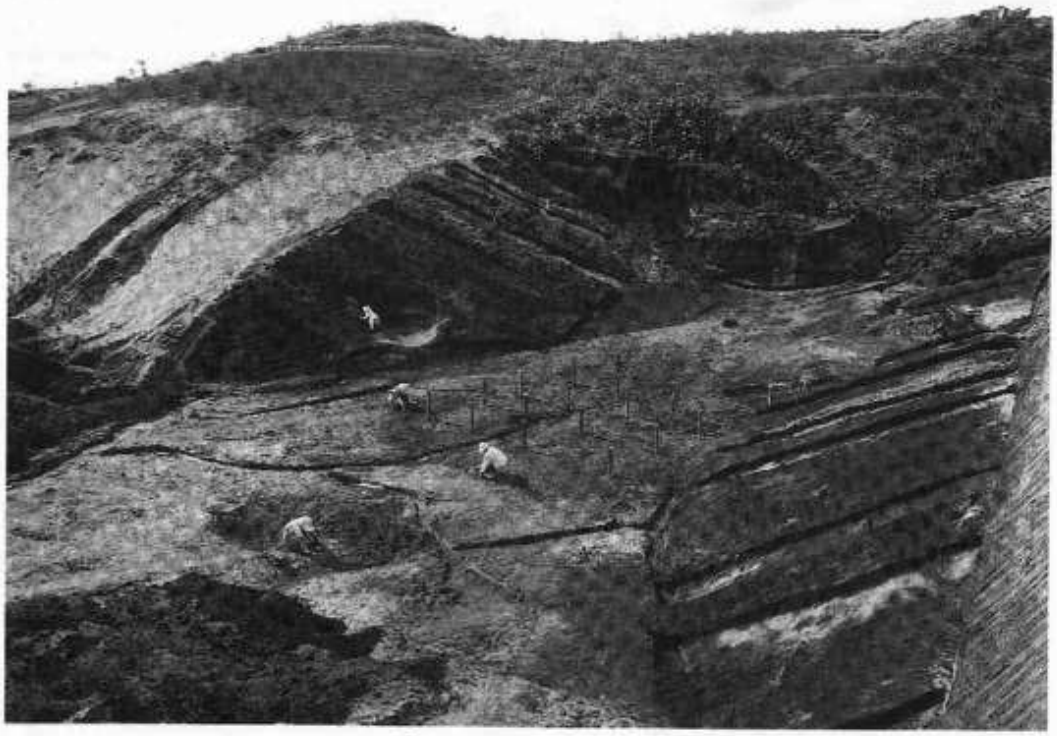
表土の遺構には大正から昭和初期のものとみられる炭焼窯跡と、その下層から発見された4間×6間の長方形に配列された柱穴列からなる建物の地杭の跡とみられる遺構がある。この建物跡は、斜面を切り下げて、平坦面を造成した所に建てられたものとみられる。時代を示す遺物は得られていないが、層位的に大正時代以前であり、18世紀前半の火山灰層の上に位置するところからそれ以降の幕末から明治時代の時間的な幅におさまるものである。弘化三年（1846年）に松浦武四郎が、この場所を描いた図に、沢の中に建てられた比較的大きい建物がある。この建物は、「ビビ憩所」とされ、また「ビビ小休所」と記されたものであり、発見された建物跡はこの「ビビ小休所」の遺構とみなされる。文献の上からは、19世紀前半の50年間ほど、当時「千歳越」または「勇払越」と呼ばれていた内陸交通路の要として利用されてきた建物で、幕府直轄時代に設置されたものとみられる。



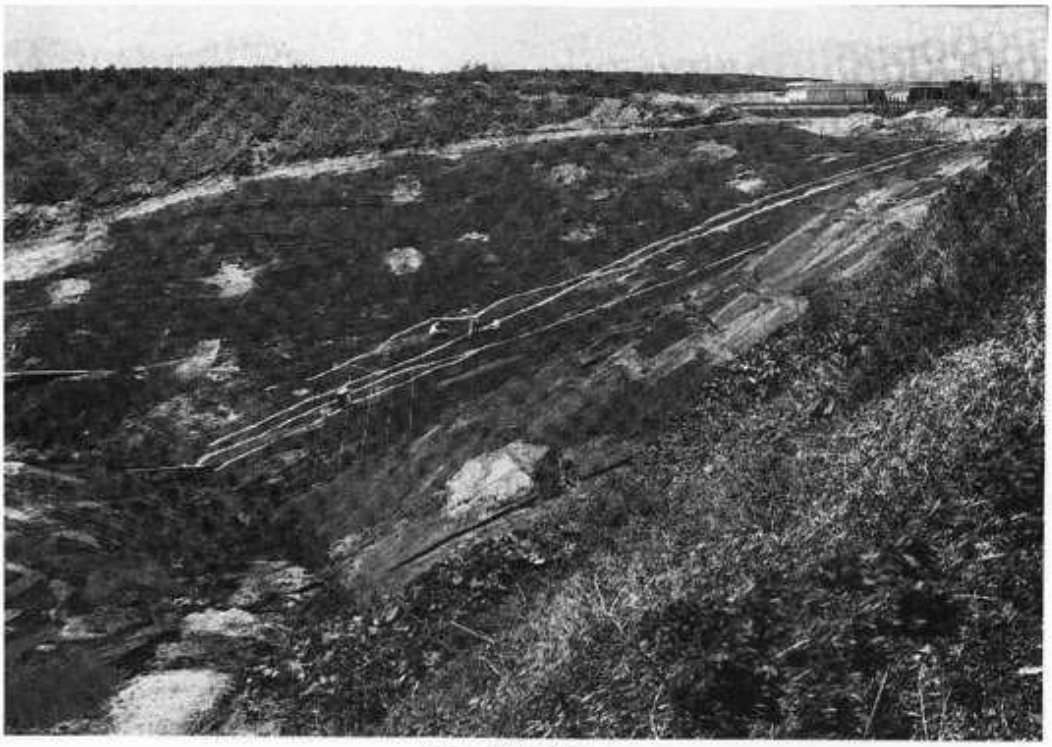
美々8遺跡第Ⅱ黒色土層遺構位置図

表土層遺構位置図


64
65
66
67
68
h
g
f
e
d
c
b
a
60
62
57
56
N
0
50M
美々8遺跡第Ⅰ黒色土層遺構位置図
美々7遺跡



「ビビ小休所」跡



中・近世の道跡

滝里23遺跡（E－04－86）・滝里38遺跡（E－04－87）・滝里39遺跡（E－04－88）

事 業 名：滝里ダム建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局石狩川開発建設部

所在地・調査面積：滝里23遺跡　芦別市滝里町88－1　1,400 m²

滝里38遺跡　芦別市滝里町31－4ほか　900 m²

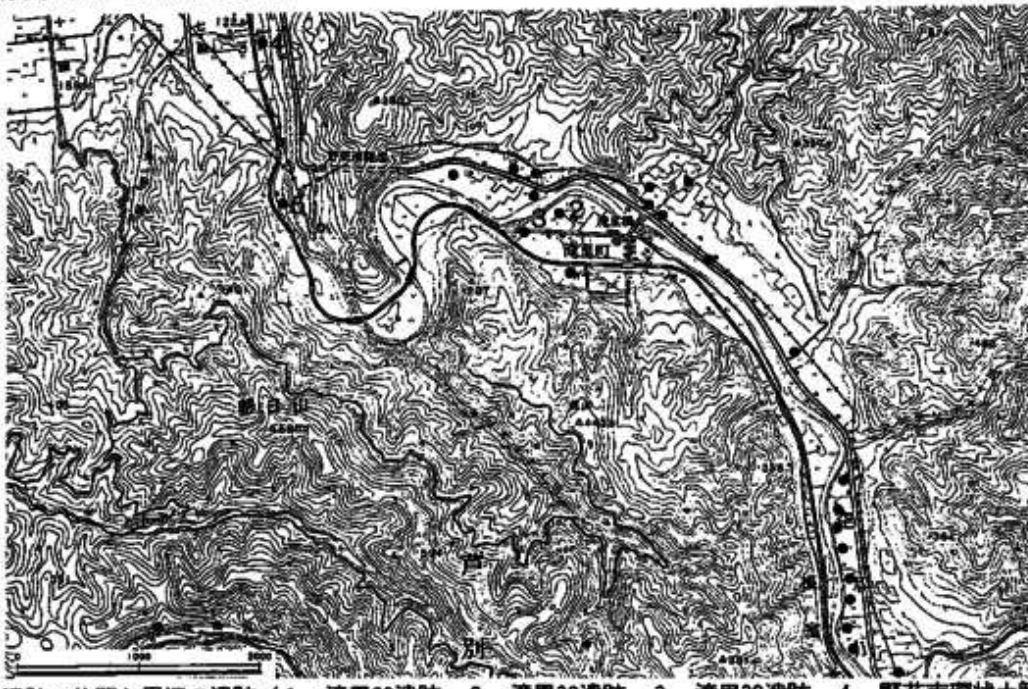
滝里39遺跡　芦別市滝里町16－1ほか　3,600 m²

発掘期間：平成元年9月4日～10月28日

調 査 員：西田　茂、佐川俊一、皆川洋一

北海道開発局では昭和47年から石狩川水系空知川の芦別市滝里町地先に滝里ダムの建設を計画しており、現在既にその関連工事が実施されている。また、ダム建設にともなう埋蔵文化財の所在確認および範囲確認調査が、北海道教育委員会文化課によって昭和61年5月から昭和63年8月にかけて実施された。その結果、ダム建設工事用地内において本調査が必要な遺跡は22遺跡、調査面積は約168,000 m² と判明した。(財)北海道埋蔵文化財センターが実施した今回の調査は第一年次にあたり、3遺跡、5,900 m² を対象とした。

石狩川最大の支流である空知川は、その源を十勝岳火山群の一つである上ホロカメットク山に発し、富良野盆地を通った後北西へ流れる。滝里の遺跡群は、東から奈江川が空知川へ合流する付近から約6 km 下流の国道38号線野花南トンネル手前までの、空知川とそれに注ぐ小河川が浸触した河岸段丘上ないし段丘崖下に立地する。遺跡の多くは、空知川の右岸に分布し、標高は130～150 m である。



遺跡の位置と周辺の遺跡（1．滝里23遺跡　2．滝里38遺跡　3．滝里39遺跡　4．野花南環状土籬　5．野花南熊の沢　※ダム建設のために調査が必要な遺跡を示した。ただし4・5は除く。）

滝里付近では、大正の終わり頃から昭和40年代にかけ戸塚栄、安井幸雄らによって遺物が収集された。その後、昭和42年10月芦別市教育委員会の協力を得て野村崇、安井幸雄、戸塚栄らが実施した分布調査の結果、野花南を中心に18ヵ所の遺跡を確認した。このうち滝里の遺跡は5ヵ所を数える。また、昭和53年10月には滝里ダム建設による水没予定地内の埋蔵文化財分布調査を北海道開発協会の委託をうけて野村崇等が行っている。さらに滝里ダム建設のため、道教委文化課が実施した所在確認および範囲確認調査により、現在滝里町内では、43ヵ所の遺跡が知られている。

滝里23遺跡

遺跡の概要

本遺跡は、滝里駅の西方約500 m、山裾につくられた小規模な扇状地の扇端に立地する。地形は南東から北西へかけゆるやかに傾斜し、標高は約136 m である。遺跡は、造田工事の結果大きく削平され、縄文時代の包含層は残っていない。造田工事の際には、遺物が出土したとのことである。

遺構と遺物

開拓期（明治の終り頃）以降のものと思われる焼土が検出された。大きさは5.0×3.5×0.5 m（長軸×短軸×深さ）で不整な長方形を呈している。上面には、まだ完全に炭化していない材の破片がみられたが、ほかに遺物は検出されていない。

遺物は、縄文時代のものとして土器片１点(時期不明)、焼土と同時期のものと思われる鉄製品などが若干出土した。また発掘区の近くから黒曜石のフレイクが1点出土した。

滝里38遺跡

遺跡の概要

本遺跡は、滝里23遺跡の北約450 m の空知川左岸の河川堆積物上に立地しており、標高は約133 m である。なお、本遺跡の全体面積は4,500 m² あり、今回はこのうち西側900 m² を調査した。残りについては平成２年度に調査を予定している。

遺構と遺物

遺構は確認されなかった。遺物は約480点出土した。石斧の石材と同じ片岩のフレイクが多く、ほかに黒曜石のフレイク、礫などが出土している。土器は出土していない。

滝里39遺跡

遺跡の概要

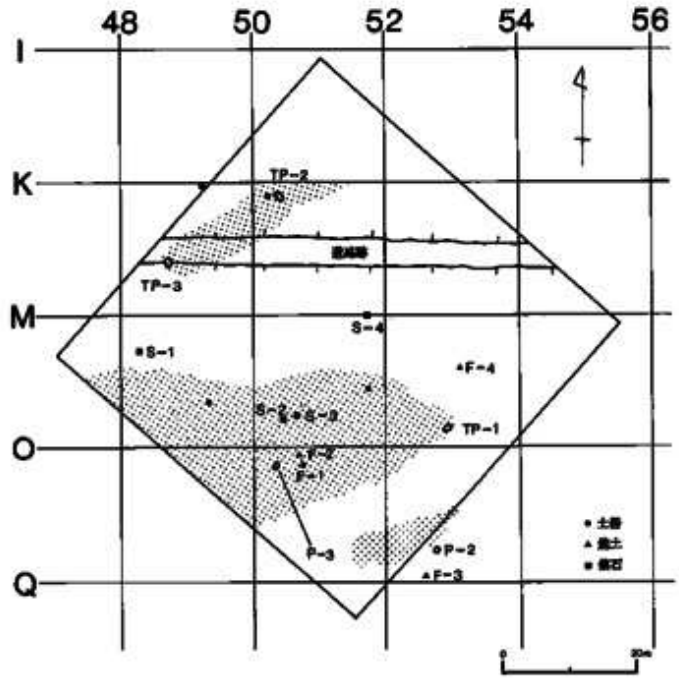
本遺跡は、滝里38遺跡の西方約350 m の空知川左岸の河川堆積物上に立地する。標高は約130 m である。調査区の中央からやや北側に明治の終り頃から使用されたと思われる古い道路跡が東西に走っており、その下部についても調査を実施した。

遺跡の基本層序は、1層：表土　2層：黄褐色粘質土(下部から続縄文時代初頭の遺物出土)、3層：黒褐色もしくは褐色土（縄文時代中期から後期にかけての遺物包含層。平坦な所では一層であるが、沢地形の深い部分では、中間に暗黄褐色土をはさみ三層にわかれる）4層：暗黄褐色土（上部が粘質土で下部は砂質土、無遺物層）5層：礫層（無遺物層）である。

遺構と遺物

検出した遺構は、土壙(P)2個（P－1は欠番)、Tピット(TP)3個、焼土(F)4カ所、集石(S)4カ所である。時期は、その検出レベル（2層と3層）からP－2とS－4は縄文時代晩期から続縄文時代、ほかは縄文時代中期から後期にかけてのものと思われる。Tピットは3例とも幅広の小判形で、その内2例は底面に杭穴を持っていた。集石は、拳大ほどの礫が径40～80 cm の範囲にまとまって出土した。その多くは火を受けて割れたり、タール状の物質が付着していた。焼土は、その大きさ、平面形がそれぞれ異なるが、おおよそ40～60 cm ほどの楕円形を呈する。F－4からは、熱を受けた黒曜石が出土した。F－1とF－2の周囲には、礫のまとまりがみられた。

遺物は、総点数約3,000点でその内訳は、土器が約400点、石器など（フレイク、礫を含む）が約2,600点である。土器は続縄文時代初頭のものが2カ所から、縄文時代中期の北筒式と後期初頭の余市式が、各1カ所から出土した。いずれも器形を復元できるほどの量は出土していない。石器では、片岩製の石斧が多く出土している。ほかに黒曜石製の槍先、つまみ付きナイフ、北海道式石冠、石皿がみられる。



滝里39遺跡遺構位置図（ドットの部分は東から西へかけての沢状の地形を示す。）

遺跡遠景（手前滝里39、左滝里38、右滝里23）

滝里39遺跡Ｐ―２遺物出土状況

滝里39遺跡調査状況

納内６丁目付近遺跡　（E－10－40）

事 業 名：北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団札幌建設局

所 在 地：深川市納内町字納内6133　ほか

調査面積：4,784 m²

発掘期間：平成元年５月８日～８月31日

調 査 員：越田賢一郎、西田　茂、佐川俊一、田才雅彦、立川トマス
葛西智義、皆川洋一、工藤義衛

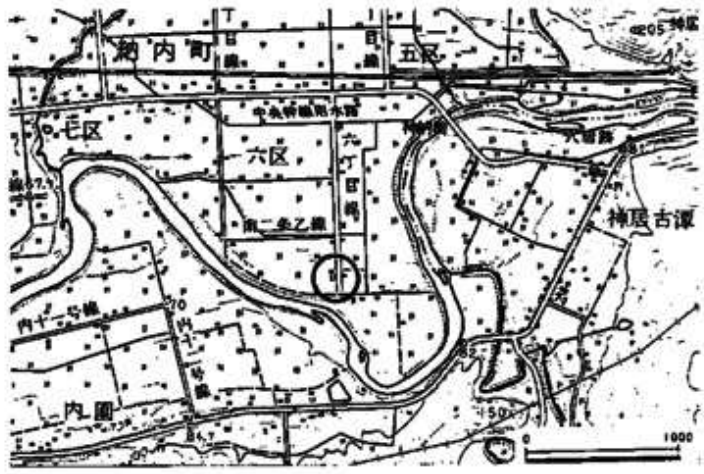
遺跡の概要

大雪山系に源流をもつ石狩川は、神居古潭の渓谷を急流となってくだり、深川の平野部にいたって、大きく南に向きを変える。そして２km 下流で、大きく北西方向へ向きを変えるあたりから流れはゆるやかとなる。このゆるやかな流れがもたらす河川堆積物が一面に広がり始めるところの右岸段丘上に、納内６丁目付近遺跡が立地している。

納内６丁目付近遺跡は、大正７年刊行の『北海道史』に、約30の竪穴が見られると紹介されているところにあたる。さらに、昭和50年刊行の『いしゅからべつ』（深川地方史研究会）には、本遺跡付近で円形の盛土墳から蕨手刀が出土したという記載がある。

遺跡の調査範囲は、道路用地となる南北約250 m 最大幅80 m で、南端は石狩川の川岸、北端は段丘崖となっている。今年度の調査区域は、調査予定地の北半中央部（標高68 m～70 m）と南端近くの排水路予定部分（標高66 m）である。

繰り返し堆積している砂礫層、砂質土層、シルト質土層、粘質土層から、縄文時代早期・前期・中期・後期、および擦文時代の遺構・遺物が検出されている。このうち、とりわけ良好に残存しているのは、縄文時代早期中茶路式の遺構・遺物である。また、調査区の北端近くに、東西にはしる幅約７m の沢地形があり、その底には長さ30 m ほどにわたって縄文時代早期の泥炭層がみられた。草木の枝葉で満たされた泥炭層からは、中茶路式土器のほかにクルミ・キハダ・ブドウなどの種子、それに昆虫などが検出されている。



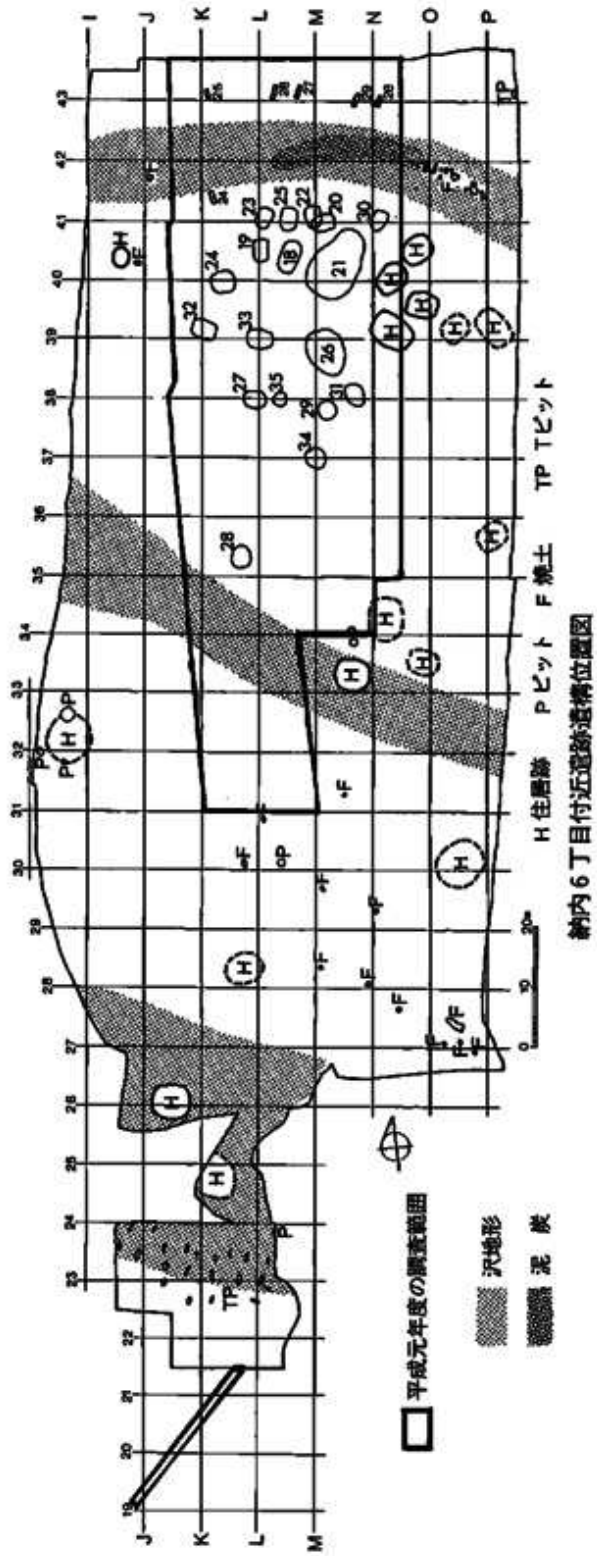
遺跡の位置

遺構と遺物

遺構は住居跡18軒（H－18～H－35）、土壙6基、Tピット6基(TP－24～TP－29）と焼土が検出された。住居跡18軒は、中茶路式土器と東釧路Ⅳ式土器の時期のものである。このうちH－21は、長径12mの不整楕円形で、中央に径1.5mの焼土がある。他の住居跡は長径4～8mの隅丸長方形で、中心部近くに焼土のあるものが多い。Tピットは、北端近くの沢地形に沿うところから検出されている。

遺物は土器・石器・剥片・礫など96,800点が出土している。このうち土器が13,600点で、その7割以上が中茶路式土器である。ほかに少量ではあるが、東釧路Ⅲ式土器、コッタロ式土器、東釧路Ⅳ式土器、縄文尖底土器、押型文平底土器（押し引き文土器）、円筒上層式土器、北筒式土器、擦文式土器などがある。また、中茶路式土器の文化層から1m以上も下層にある砂礫層から撚糸文、組紐圧痕文、無文の土器などが146点検出された。これらの土器で器形を復元できたものは、東釧路Ⅲ式土器、中茶路式土器、東釧路Ⅳ式土器など40個以上になる。

石器は石鏃・石槍・石錐・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石斧・石のみ・砥石・たたき石・石皿・台石などがある。これらの多くは中茶路式土器に伴う良好な石器群をなすもので、それぞれに特徴的な形態を指摘できる。石狩川の川原に近いこともあって、砂岩製の大きな石皿・台石が目につく。



納内6丁目付近遺跡遺構位置図

遺構調査状況（H—30）

遺物出土状況

遺物出土状況

Tピット調査状況

遺構調査状況（H—26）

遺物出土状況（北の沢）

北の沢調査状況

砂礫層調査状況

出土土器（縄文時代早期）

牛舎川右岸遺跡（J－04－06）　稀府川遺跡（旧牛舎川左岸遺跡・J－04－67）

事 業 名：北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団札幌建設局

所在地・調査面積：牛舎川右岸遺跡　伊達市南稀府町307ほか　21,523 m²

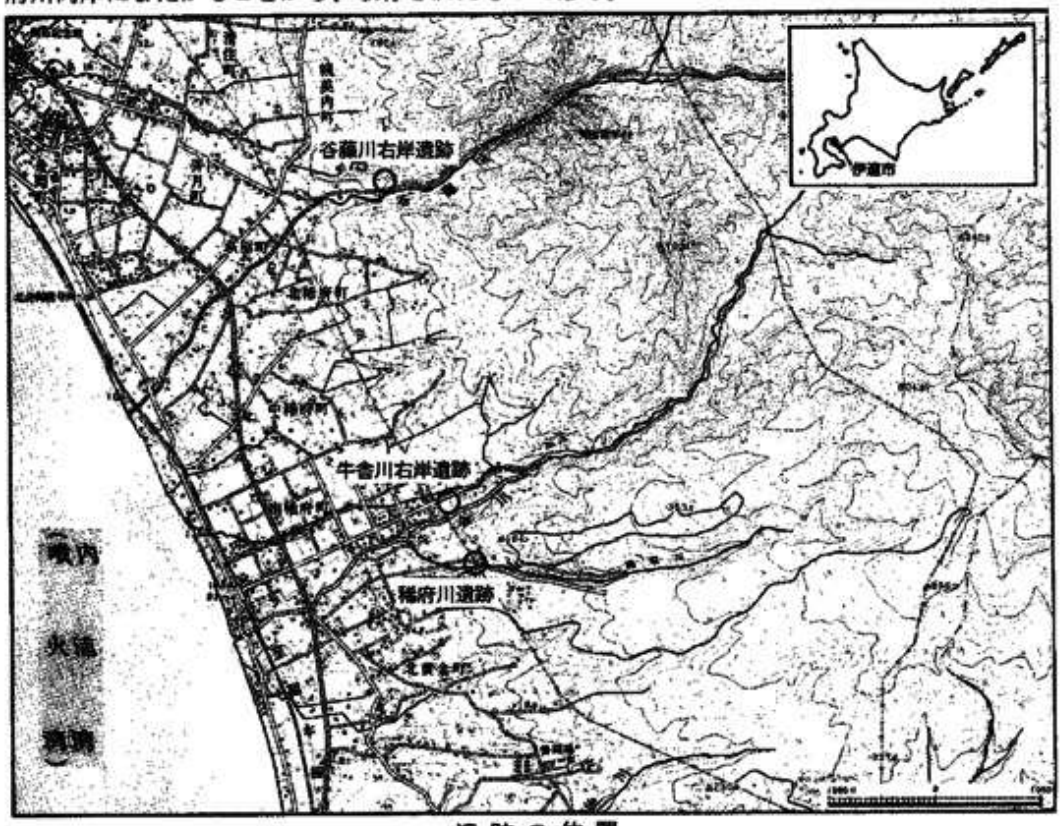
稀 府 川 遺 跡　伊達市北黄金町106―2ほか　8,977 m²

発掘期間：平成元年5月8日～10月31日

調 査 員：牛舎川右岸遺跡―鬼柳　彰、三浦正人、工藤研治、花岡正光、藪中剛司

稀 府 川 遺 跡―高橋和樹、和泉田毅、野中一宏、谷島由貴、森岡健治

昭和62・63年度の事前発掘調査（試掘調査）の結果に基づき、牛舎川右岸遺跡では確定していた調査対象範囲全域について、稀府川遺跡は対象範囲のうち、工事を急ぐ部分の発掘調査を実施した。さらに、両遺跡とも未確定部分を残していたため、並行して第3次の事前発掘調査を行った。この結果、牛舎川右岸遺跡では調査区北端の水田部分に縄文時代晩期から続縄文時代の遺物包含層が確認され、稀府川遺跡では、調査区中央部の宅地も包蔵地であることが判明した。今後、調査を必要とする面積は、牛舎川右岸遺跡が約6,300 m²、稀府川遺跡が約7,200 m²である。なお、稀府川遺跡は昨年度まで、牛舎川左岸遺跡と称してきたが、牛舎川の支流、稀府川両岸にまたがることから、改称されたものである。



遺 跡 の 位 置

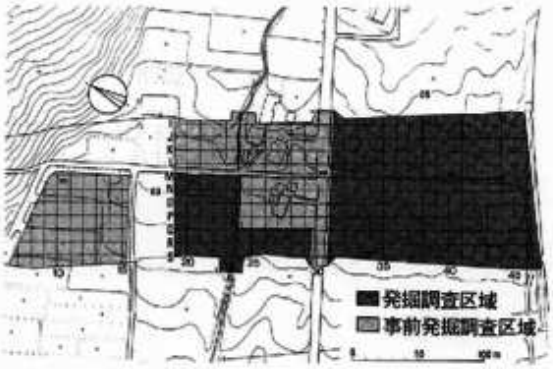
牛舎川右岸遺跡　遺跡の概要

牛舎川は鷲別岳（911 m）の中腹に源をもち、約8 km西流して内浦湾（噴火湾）に注ぐ。牛舎川右岸遺跡は、河口より約2.5km上流の扇状地に立地している。調査区はおもに畑地として利用されており，地表には牛舎川に平行する旧河道跡のくぼみが残っている。

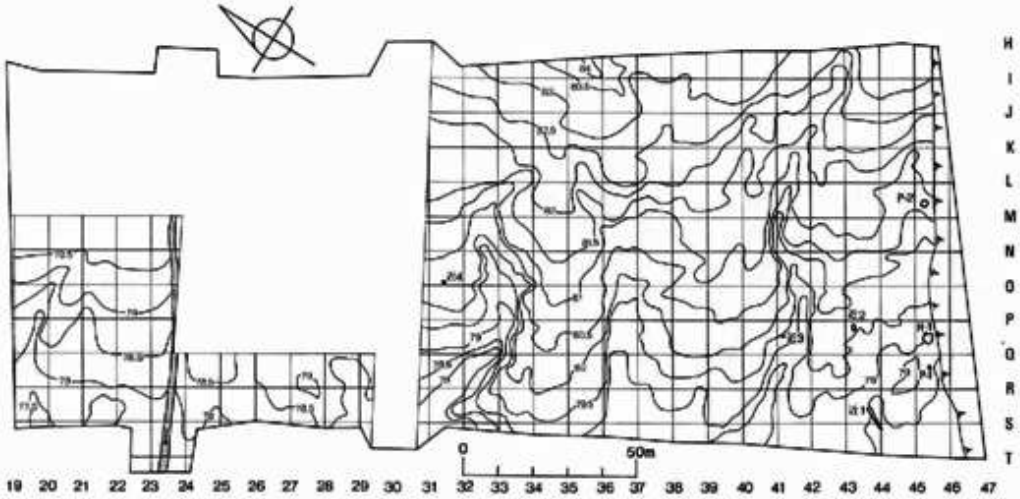
耕作土下には有珠山起源の火山灰が2枚堆積している。遺物包含層はこの下の第5層（黒褐色土・下部は黄褐色）で、所々に白頭山起源の火山灰が観察される。扇状地の基盤は安山岩礫層からなり、遺物包含層にも大小の礫が大量に含まれていることから、本遺跡の地形は牛舎川の氾濫によって、たびたび改変を受けたものと推定される。旧河道間の高い部分は耕作によって、遺物包含層が削平された部分があり、川岸には畑地造成や護岸工事の際の盛土があった。

遺構と遺物

川岸沿いで発見された竪穴住居跡1軒と土壙2基は、出土遺物から縄文時代中期後半の遺構とみられる。ほかに、第3層で確認された近世の土壙3基と焼土1ヵ所がある。出土遺物は約13,000点。大部分は土器片で、縄文時代中期の柏木川式、大安在B式に並行する資料が主体である。このほかに、縄文時代早期・晩期、続縄文時代、擦文時代の土器も出土している。石器は鏃、槍先、スクレイパー、石斧、砥石などがあり、なかでも石斧がほかの器種に比べて多い。遺物の分布状態をみると、調査区南部では濃密だが北部では稀薄である。また、遺物の時期による分布傾向もみられる。遺物包含層中には調査区全域にわたって，焼土が分布していたが遺物分布との相関性がみられず、成因については詳かではない。



調　査　区　域



牛舎川右岸遺跡遺構位置図（等高線は調査最終面）

稀府川遺跡　遺跡の概要

稀府川は鷲別岳の西側斜面を深く刻んで西流、丘陵部を出て牛舎川に合流している。遺跡は合流点より約1km上流の小規模な扇状地に立地している。調査区は稀府川の両側に広がっており、北端は水田、ほかはおもに畑地になっている。

層序は牛舎川右岸遺跡と基本的に同様だが、本遺跡の遺物包含層は第5層の褐色土及び第6層の褐色ローム質土の2枚である。層中には扇状地堆積物の安山岩礫が大量に含まれており、とくに調査区南部（稀府川左岸）では稠密である。調査区を横断して発掘された河道跡は、稀府川の古い流路とみられ、内部には大小の礫が堆積している。

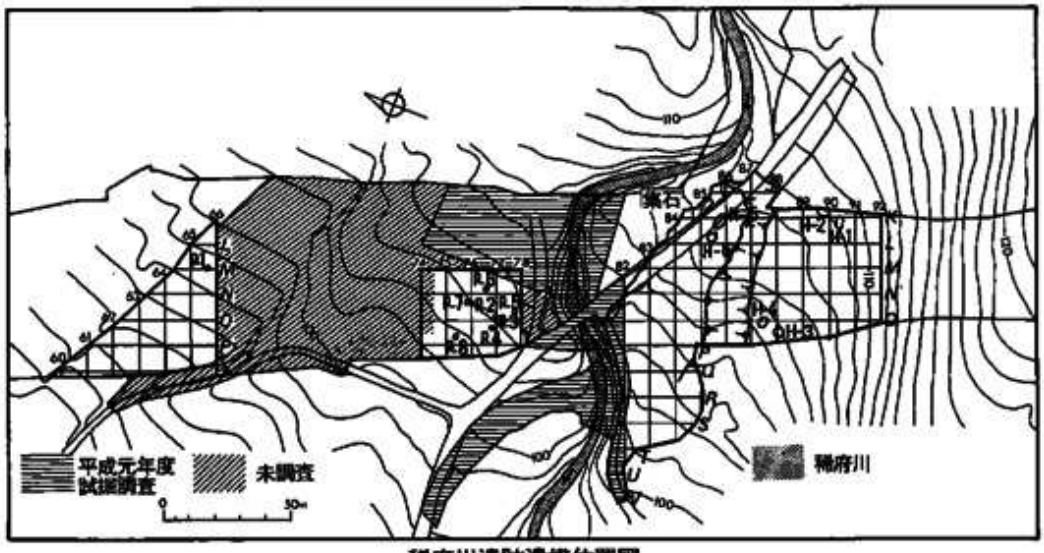
調査区内の市道部分は上層を削平されていたが、遺物包含層や遺構が良好に残されていた。

遺構と遺物

旧河道跡からは、縄文時代中期から晩期に至る遺物が出土しており、この河道跡が当時の流路であったと推定される。河道跡の南側に4軒、北側に2軒の竪穴住居跡が発掘された。これらの住居跡は、いずれも大小の礫を除去したあとに浅くつくられており、長期に亘って使用したものとはみられない。時期は出土遺物からH－1と2が縄文時代後期末、H－3から6は縄文時代晩期ないし続縄文時代と推定される。稀府川右岸の調査区では、土壙が7基発掘された。

出土遺物は約27,000点。大部分は土器片で、縄文時代早期から晩期、続縄文時代及び擦文時代に至る各時期のものがある。このうち主体を占めるのは、縄文時代後期の手稲式、堂林式土器や晩期の土器である。石器も鏃、槍先、ナイフ、スクレイパー、石錐、石斧、砥石、石皿など各種のものがある。住居跡H－1では、縄文後期末の耳栓が1点発見された。このほか耕作土からは、近世の陶磁器片も出土している。これらの遺物の多くは、稀府川左岸の調査区で出土しているが、遺物の時期による分布傾向のちがいがみとめられる。

本遺跡にも焼土が全域に分布しており、一部では種子や骨片が検出された。



稀府川遺跡遺構位置図

牛舎川右岸遺跡
　上左：調査状況
　上右：出土土器

稀府川遺跡
　中左：遠　景
　中右：調査状況
　下左：遺物出土状況
　下右：集石検出状況

谷藤川右岸遺跡　（J－04－74）

事 業 名：北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団札幌建設局

所 在 地：伊達市萩原町214

調査面積：1,813 m²

発掘期間：平成元年８月21日～10月31日

調 査 員：越田賢一郎、立川トマス、田才雅彦、葛西智義

遺跡の概要

本遺跡は谷藤川が形成した扇状地の扇頂部分（標高約100m）、西流する谷藤川が大きく南へ蛇行する地点に位置する。この川筋は、かつて登別方面に抜ける山越えルートとして利用されていたという。またこの川水は、開拓期以降今日まで地域住民の飲料や農業用に重用されており、今なお硫水が残され、水神様が祭られている。

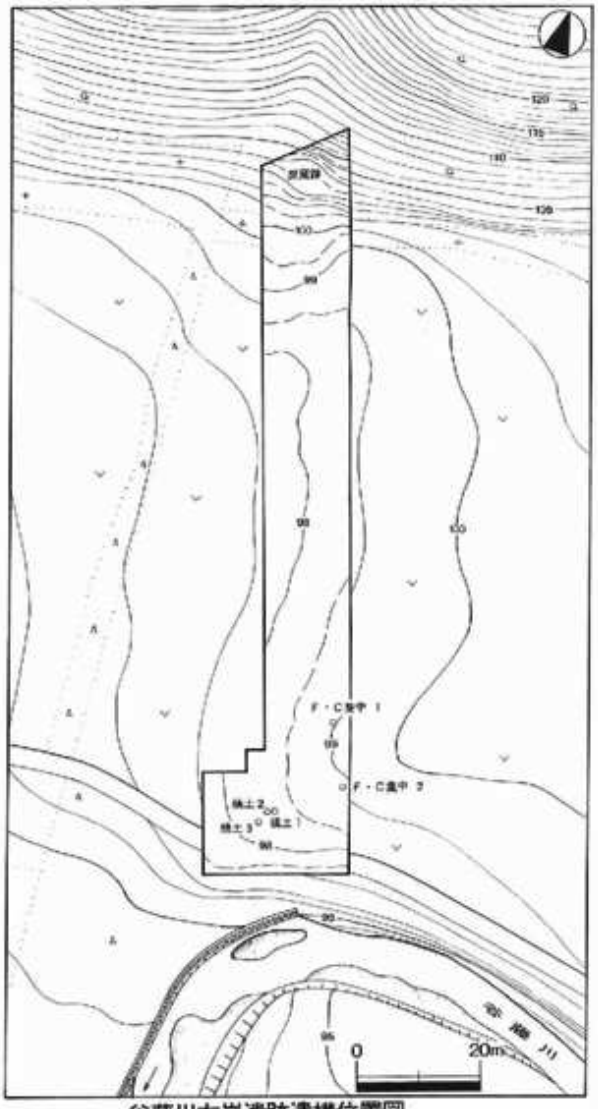
遺跡の主体部は、谷藤川の蛇行地点沿いに緩く張出した舌状部分にあたる。今回の調査区はその舌状部から、炭窯が確認されている丘陵裾部分までで、間に小さな沢跡がある。なお、当初の調査区は本線部分のみであったが、10月に実施された北海道教育庁文化課の範囲確認調査の結果、急遽市道付け替え部分が調査範囲に組み込まれた。

遺跡の営まれた時期は、試掘段階では縄文時代早期・中期と考えられていたが、調査の結果、続縄文時代後北C_2期の土器と焼土も検出されている。周知のように伊達市域では、海岸線に沿って貝塚を中心とした遺跡が濃密に分布しているが、南稀府５、牛舎川右岸、稀府川、本遺跡と、伊達市南部の扇状地に立地する遺跡の調査が進み、いずれの遺跡でも僅かずつ続縄文時代の資料が得られている点は、遺跡の立地とその在り方を考える上で非常に興味深いものがある。また、この辺りは有珠の火山灰に厚く覆われているため、保存状態良好な未発見遺跡が相当数残されていると思われる。

遺構と遺物

今回確認しえた遺構は、前述した後北期のものと思われる焼土三カ所のほかは、帰属時期不明の剝・砕片集中地点（Ｆ・Ｃ集中）二カ所と、太平洋戦争末期に使用されていた炭窯一基である。なお、有珠ｂ火山灰の降灰（1663年）に伴うと思われる焼土や炭化物が随処にみられた。

遺物は約3,000点が出土しており、土器型式でみると縄文時代早期のコッタロ式が約15個体分ともっとも多く、次いで中期の天神山・柏木川式相当のものが約11個体分、早期の中茶路式が約９個体分となっている。なお後北C_2式は、ほぼ１個体分が出土している。遺物の分布をみると、早期は谷藤川沿いの舌状部を中心に沢跡の手前まで広がっている。これに対し、中期は調査区全体、殊に他の時期の遺物がほとんどみられない沢跡部分から北側での出土が目立つ。後北C_2式は、焼土１～３地点周辺からの出土である。石器は約50点の出土で、石鏃が18点を占める。形態的には無柄凹基が主体であるが、出土状況にはまとまりはみられない。特徴的な石器としては、縄文時代早期に伴う断面三角形のすり石が３点出土している。



谷藤川右岸遺跡遺構位置図
(発掘区内のコンターは包含層上面)

炭　　窯

沢跡調査状況

遺物出土状況（1）

遺物出土状況（2）

フゴッペ貝塚　（D－19－2）

事 業 名：北後志東部地区広域営農団地農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道後志支庁

所 在 地：余市郡余市町栄町87、343～346、376、507～511、513、522

調査面積：5,833 m²

発掘期間：平成元年5月10日～11月11日

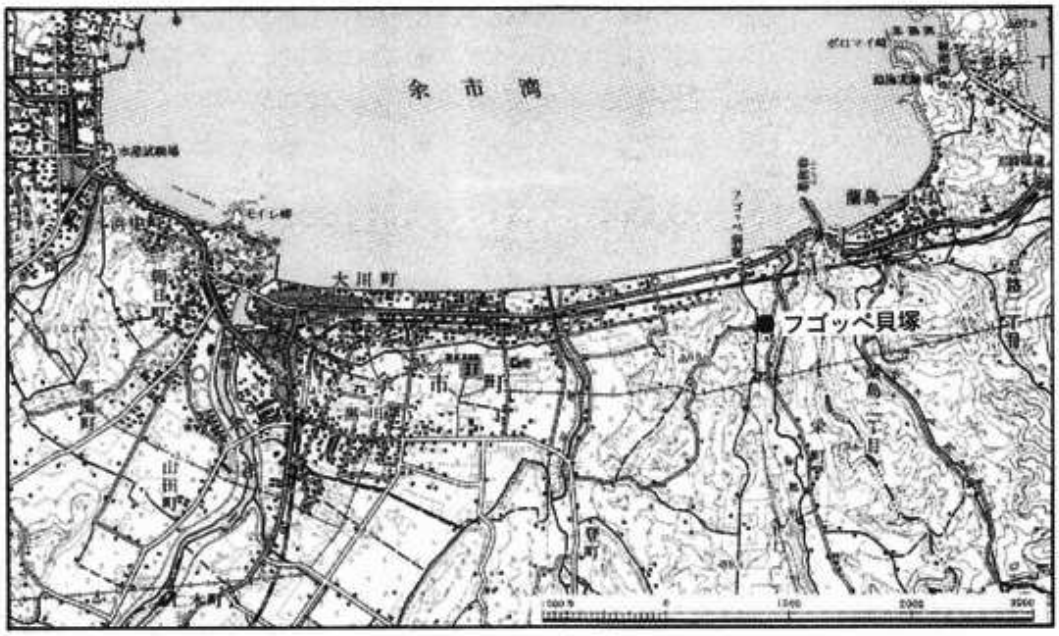
調 査 員：千葉英一、長沼　孝、熊谷仁志、中田裕香、鈴木　信

遺跡の概要

遺跡は、余市町の東端、余市湾に注ぐ畚部（ふごっぺ）川の左岸に位置している。遺跡は現海岸線から600 m 内陸に入った所で、北方400 m には国指定史跡フゴッペ貝塚、東方500 m には道指定史跡西崎山ストーンサークルなどが、さらに南西1.1 km には今年度同時に調査を行った登町2・3遺跡が所在している。

本遺跡は、大正7年寺田貞次によってその所在が報告(「北海道小樽附近古代住民の遺跡に就て」『考古学雑誌』9－3）され、その後、河野広道、五十嵐鉄、酒詰仲男などによって出土の土器や貝塚の状況が紹介されたが、発掘調査などは行われたことがなかった。唯一貝塚の状況を知ることができるのは、昭和17年に松下亘が行った試掘調査の報告（『畚部貝塚の研究』昭和17年7月、「余市郡余市町フゴッペ貝塚について」『北海道史研究』33　昭和58年12月）のみである。松下の報告によれば、カキを主体とする2枚の貝層があり、貝層から出土した土器は、いわゆる余市式であるという。

今回の調査区域は、遺跡の南端と思われ、今回新たに確認した貝塚は、従来知られていた貝



遺 跡 の 位 置

塚（松下の試掘地点）とは150ｍ程の距離がある。

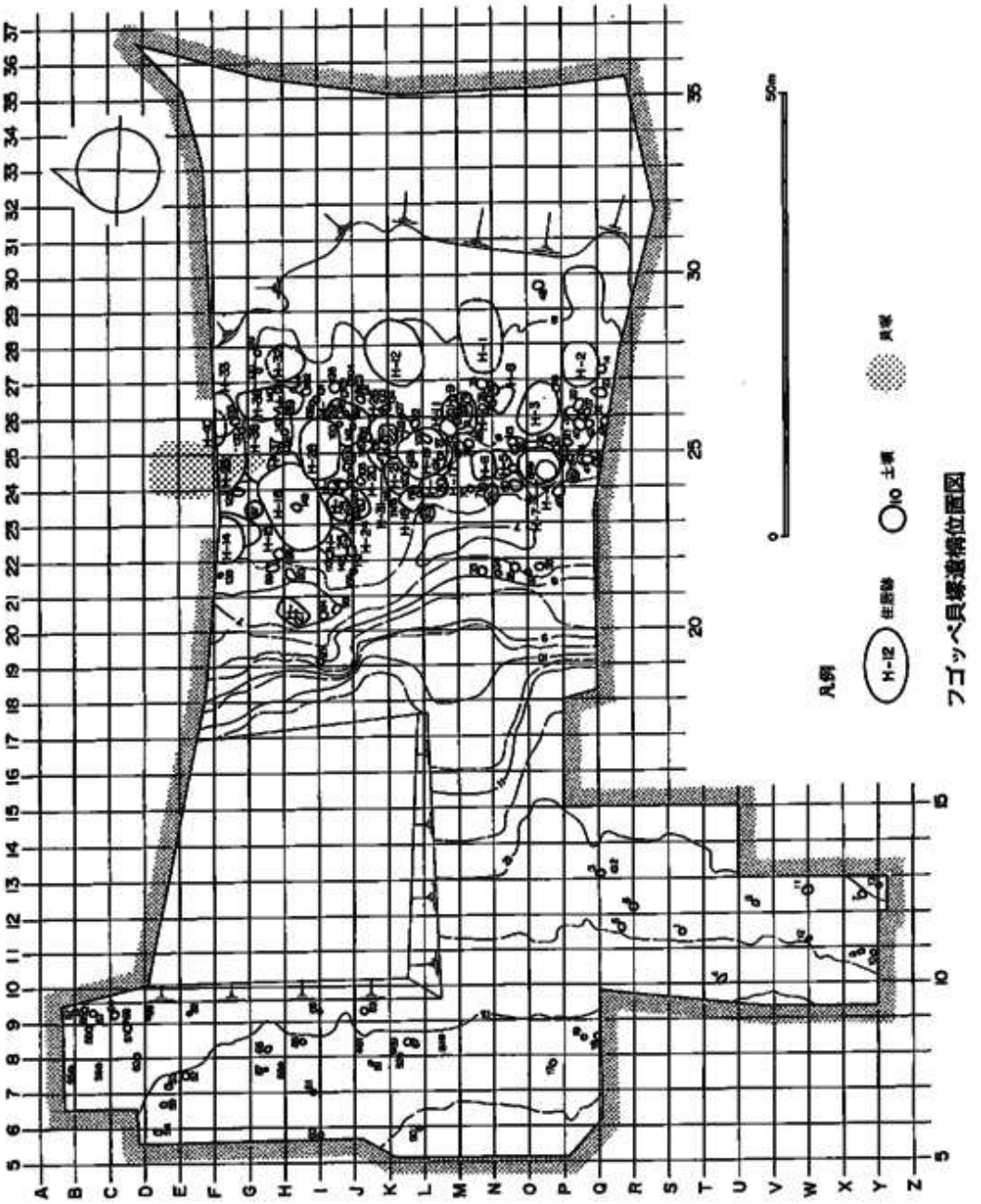
調査区域は地形の上から大きく４つの部分に分けることができる。第一は調査区域の西端、標高12～13ｍの丘麓緩斜面、住居跡はなく縄文晩期終末の土壙が散発的に47基発見された。第二は丘麓緩斜面と沖積低地の間の急な斜面および沢状の旧河道部、最深部は地表から2ｍ、縄文中期を中心とした遺物が多量に出土、下部では湧水がみられたものの、泥炭層や有機質の遺物などは全くみられなかった。第三は標高８ｍ前後の沖積低地、住居跡、土壙の集中区域、遺物、遺構は縄文中期が主体、畑地・道路造成、住宅建設などによって上部はかなり破壊されていたが、遺構の残存状況は良好であった。第四は調査区域の東端、畚部川の氾濫原、かつて水田として耕作が行われていた部分で、上部には西側の沖積低地を削平した際の盛土があり、水田土壌の下部は流木を含んだ粘土層、砂礫層が堆積、遺物は盛土から水田土壌にかけて縄文時代～現代の各時期のものが出土、プライマリーな包含層、泥炭層などは全くなかった。

遺構と遺物

確認された遺構は、住居跡40軒、土壙148基、焼土23ヵ所、貝塚３ブロックなどである。住居跡は縄文中期初頭とみられるものが36軒、他は中期末葉と考えられる。中期初頭のものは、大きさ、平面形、主柱の状況などにバラエティーがみられ、中には２段構造のものもある。土壙は時期別でみると大きく晩期と中期のものに分けられる。晩期の土壙は、平面形が円形で、礫が詰まったものが多く、主に丘麓緩斜面に分布している。中期の土壙は、平面形が楕円形で、断面形が皿状のものが多いが、中には断面形が四角形で、墓と考えられるものもみられる。貝塚は中期初頭の住居跡の覆土中に発見されたもので、時期は中期末葉と考えられる。

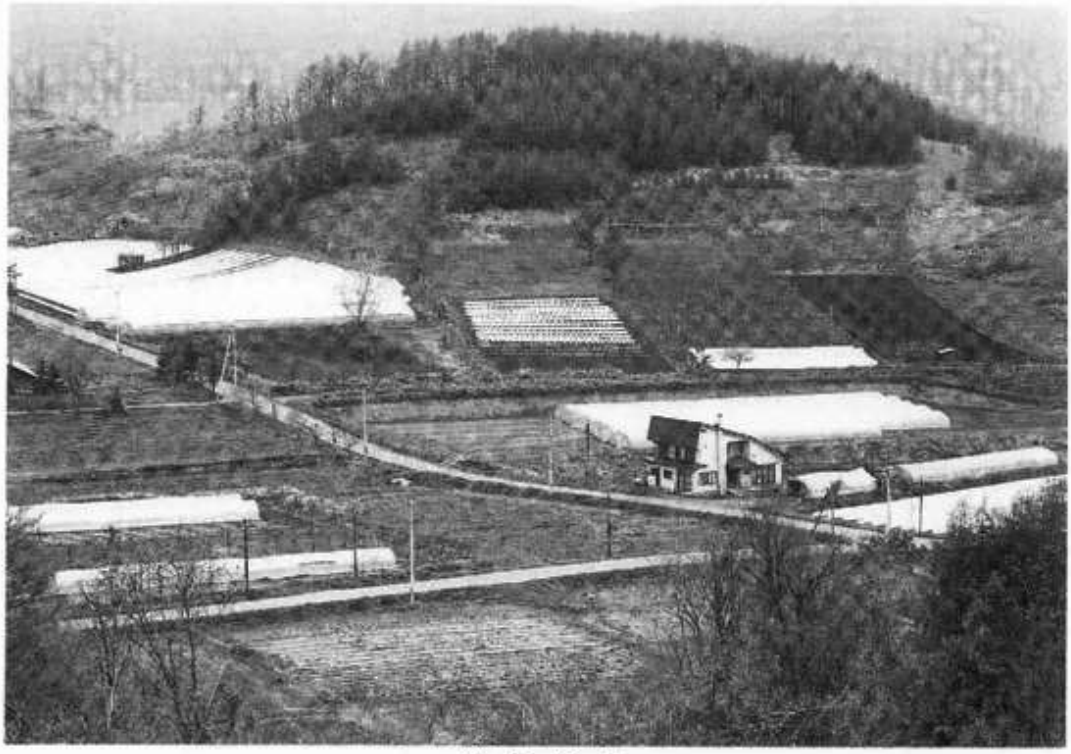
遺物の量は膨大で、現地調査が終了した段階で、水洗・未水洗合わせて遺物を収納したコンテナ数は1700箱におよび、さらにコンテナに収納できない大型の石皿・台石なども多数ある。10月中旬段階で水洗を終了した遺物は約64万点、その内訳は、土器14万点、石器２万点、フレイク36万点、礫12万点である。土器などは、縄文早期～晩期、続縄文・擦文時代、近代～現代の各期のものがあるが、主体は縄文中期で、円筒土器下層ｄ式～上層ａ式に相当するものが多く、他にサイベ沢Ⅶ式、天神山式、北筒式などのものがみられる。石器は、石鏃、石錐、ポイント、つまみ付きナイフ、スクレイパー、楔形石器、石斧、すり石、北海道式石冠、たたき石、くぼみ石、石鋸、石皿、台石、石錘など各種あるが、北海道式石冠、たたき石、石皿、台石などの礫石器が他の遺跡に比べ非常に多い。土・石製品としては、土偶、玦状耳飾、垂飾、有孔土製円板などがみられる。貝塚からは銛先、釣針、針などの若干の骨角器のほか、イガイ、カキを主体とする貝類、海獣骨、ヒラメ、カレイ、サケ、ニシンなどの魚骨なども出土している。

出土土器の主体をなす縄文中期初頭と考えられる土器群は、従来断片的な資料しか知られておらず、本遺跡のように多くの住居跡から各種の石器とともに多量に発見されたのは初めてのことである。遺構と遺物の詳細な検討は今後の作業であるが、資料の内容と量からみて、本遺跡は道央部における該期の標式的な遺跡となるものと考えられる。なお、貝塚の水洗作業や報告書作成作業は来年度も継続して行う予定である。



フゴッペ貝塚遺構位置図

航空写真・遺跡遠景



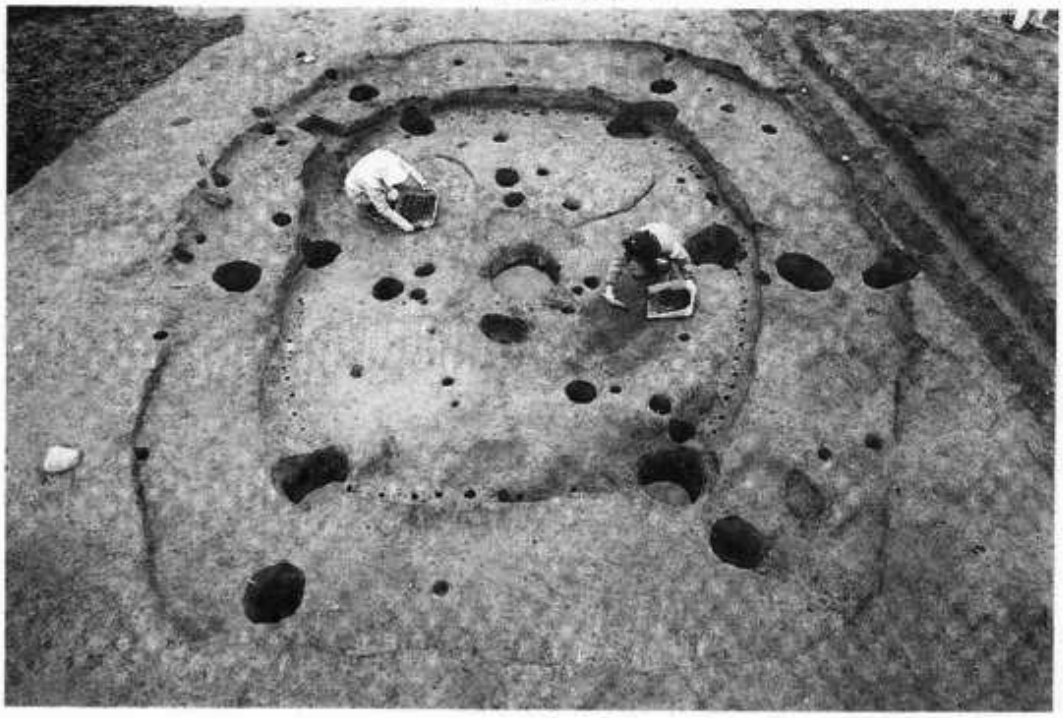
遺 跡 近 景

沖積低地・氾濫原調査状況

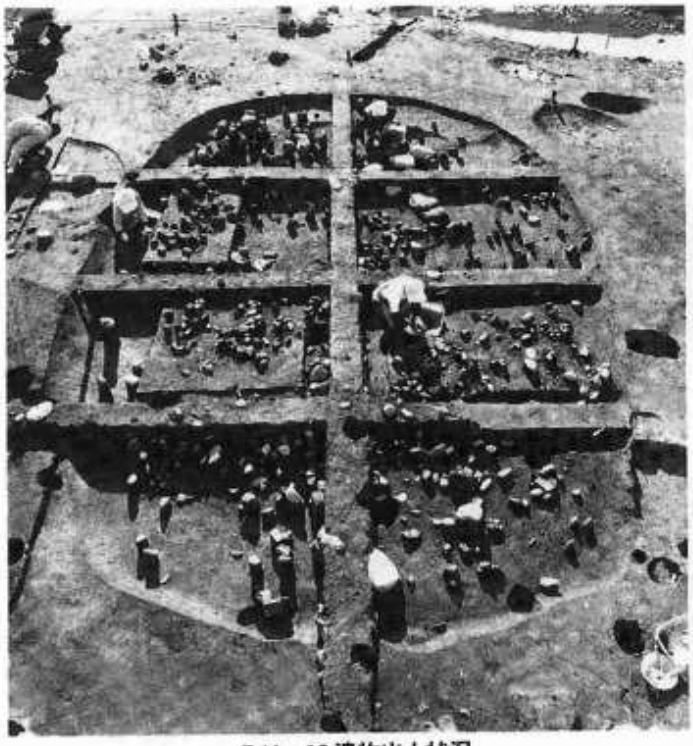
遺構調査状況

住居跡群（人のいるところが住居跡）

F H—12 遺物出土状況



F H—12 全　景



ＦＨ—16 遺物出土状況

ＦＨ—16 石皿など出土状況

ＦＨ—16 出土の土偶

ＦＨ—16 全　　景

ＦＨ—4・7 全　景

ＦＨ—8 遺物出土状況

ＦＨ—23・24 全　景

ＦＰ—38 遺物出土状況

ＦＰ—23 遺物出土状況

ＦＰ—50 遺物出土状況

ＦＰ—130 ヒスイ垂飾出土状況

貝塚調査状況

貝塚ブロック断面

銛先出土状況

獣骨（キツネ）出土状況

登町２遺跡　(D－19－26)

事 業 名：北後志東部地区広域営農団地農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道後志支庁

所 在 地：余市郡余市町登町218　ほか

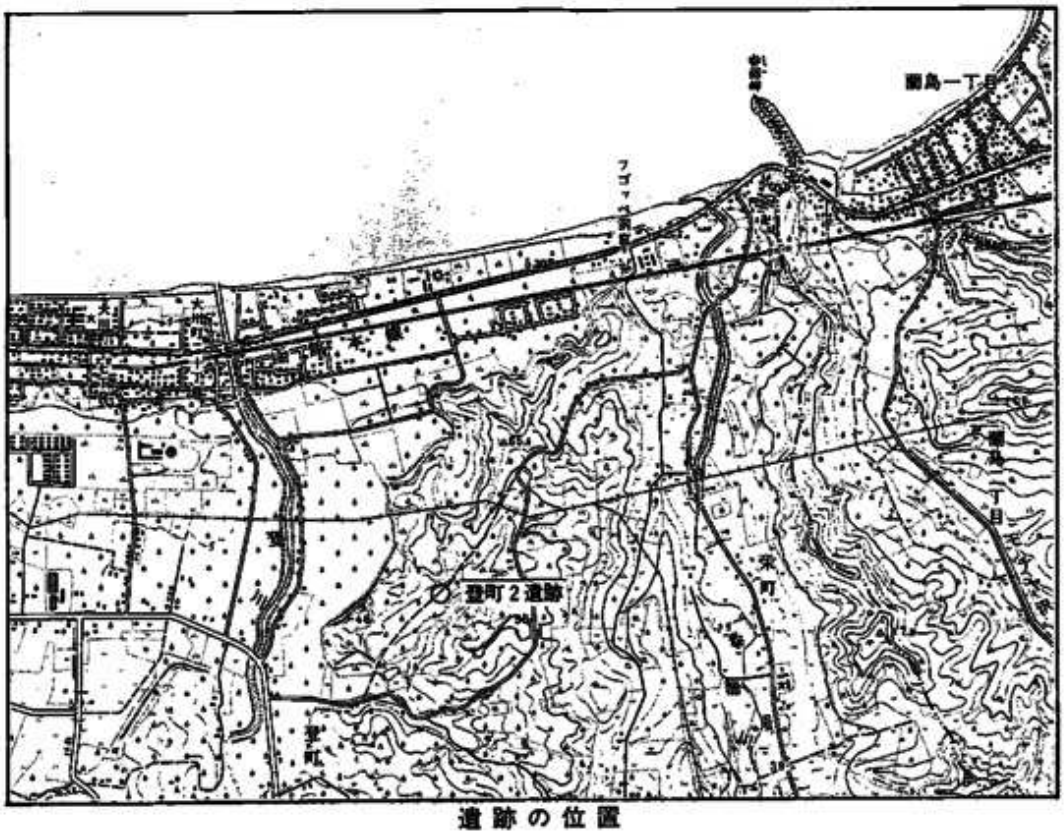
調査面積：1,860 m²

発掘期間：平成元年５月16日～７月17日

調 査 員：千葉英一、長沼　孝、熊谷仁志、中田裕香、鈴木　信

遺跡の概要

本遺跡は、余市町市街地の東約3.5 km、海岸線から約１kmに位置し、登川右岸の南西に延びる丘陵の南側緩斜面上に立地する。登町２・３遺跡は、同じ沢の上流と下流という位置関係にあり、登町２遺跡は下流にある。調査区の標高は25～29 m。調査前までは、削平が加えられ果樹園、道路と利用されていたため包含層の残存状態が悪いことが予想されていたが、調査がすすむにつれ、調査区を横断する二条の浅い沢が検出され、部分的にプライマリーな包含層が認められた。本遺跡の基本的な層序は、上位から、耕作土(道路部分の盛土も含む、Ⅰ層)、黒色土（Ⅱａ層)、暗褐色土（Ⅱｂ層)、暗黄褐色土（漸移層：Ⅲ層)、黄褐色粘質土（地山：Ⅳ層）である。遺物は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ層から出土する。本来の遺物包含層はⅡ、Ⅲ層である。耕作と削平がⅣ層までおよび、Ⅱａ層は浅い沢部分に認められた。



遺跡の位置

遺構と遺物

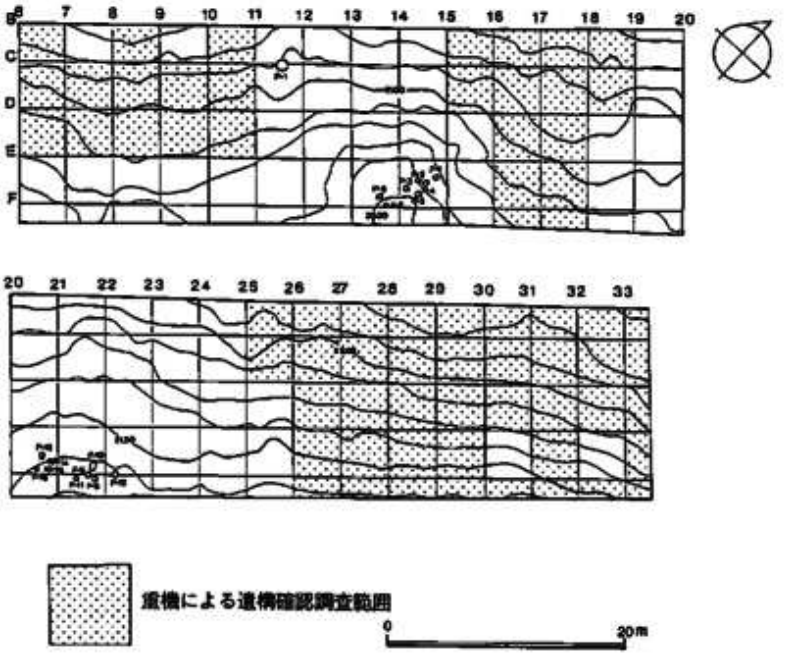
遺構は、土壙（1）、焼土（16）が検出された。土壙の平面形は円形、径60 cm 程の小型のものである。焼土は、二条の浅い沢部分にそれぞれまとまって発見されている。

遺物は、約25,000点出土している。このうち土器は、約8,000点、主体は、縄文時代中期の北筒式で、全体の90%以上を占める。この他に同中期の円筒土器上層式、見晴町式、同晩期の大洞式等がある。

石器は約700点で、器種には、石鏃、ポイント・ナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、石槍、石斧、たたき石、すり石（北海道式石冠も含む）、砥石、石鋸、石皿（台石）、石核等があり、とりわけ淡緑色の頁岩の剝片に刃部を作出した石錐が狭い範囲からまとまって出土している。この他に石屑（フレイク）、礫△（有意の礫）、礫等約16,700点ある。

調査の結果、登町２遺跡は、比較的混在の少ない北筒式の時期の遺跡と思われる。従って、出土した石器のほとんどは、この時期に属するものと考えることができよう。

１から３は北筒式である。１と19はほぼ同地点から出土している(写真図版参照)。２は先端部が「く」字状の篦状工具を用い、全面に押引文が施されている。図示した石器は、北筒式に伴うと思われるものである。４は石鏃、５・６はポイント・ナイフ、７～14は頁岩製の石錐、15は石核、16は石斧、17はくぼみ石、18・19はすり石（19は北海道式石冠）、20は砥石である。



登町２遺跡遺構位置図

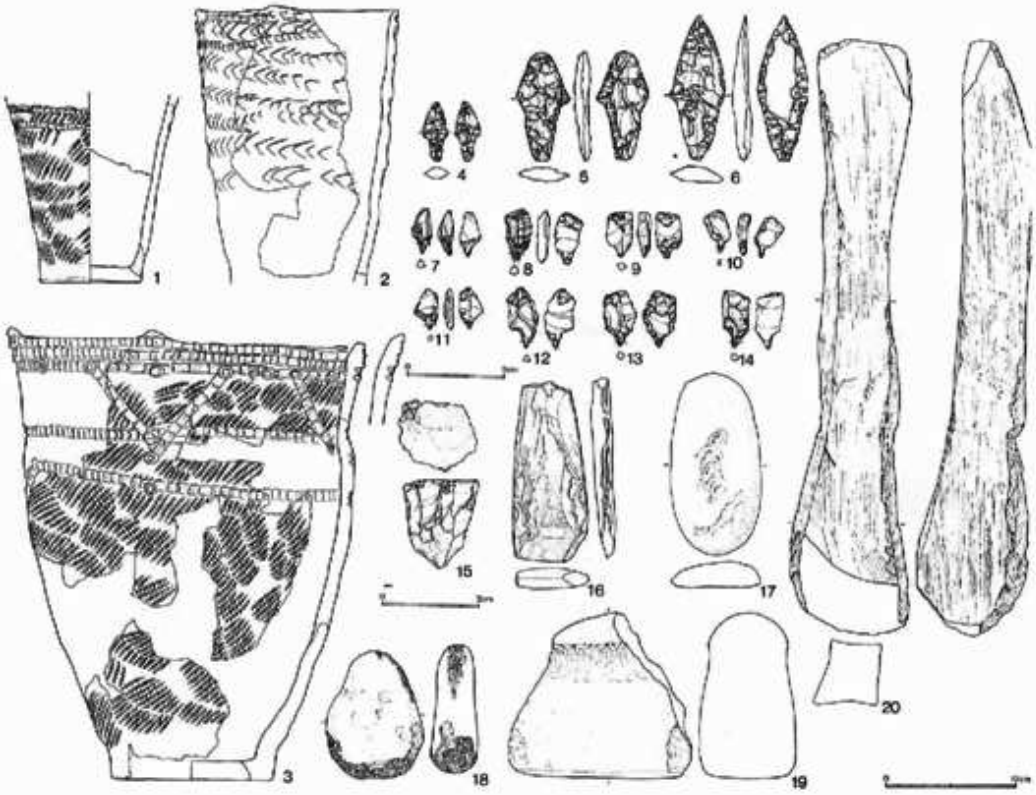
遺 跡 近 景

発掘調査状況

発掘調査状況

遺物出土状況

遺物出土状況



登町２遺跡出土遺物

登町３遺跡　(D－19－25)

事 業 名：北後志東部地区広域営農団地農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道後志支庁

所 在 地：余市郡余市町登町213ほか

調査面積：1,120 m²

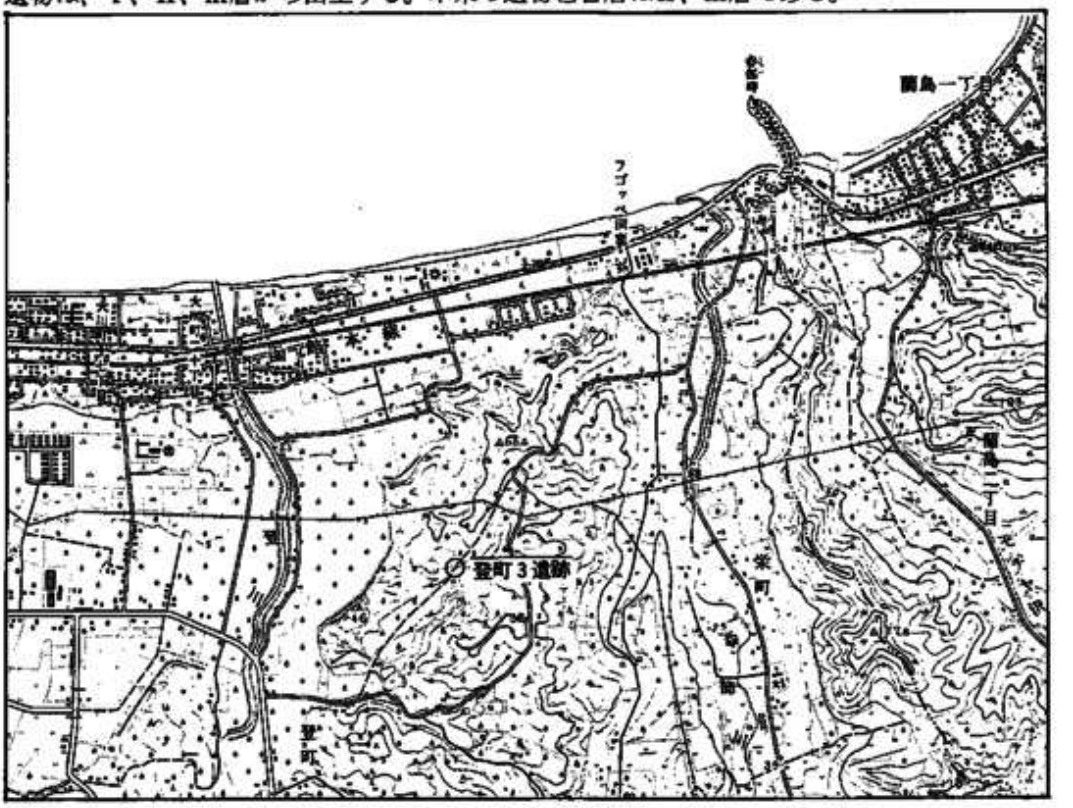
発掘期間：平成元年５月16日～７月１日

調 査 員：千葉英一、長沼　孝、熊谷仁志、中田裕香、鈴木　信

遺跡の概要

本遺跡は、余市町市街地の東約４km、海岸から約１km、登川右岸の南西にのびる支脈の南側緩斜面上にある。登町３遺跡は、前述の登町２遺跡の上流約400 m の沢頭部分に位置する。調査区の標高は27～31 m。調査前は、果樹園、畑地、道路として利用されていたため、包含層の残存状態が悪いことが予想されていた。調査がすすむにつれ、遺跡が沢頭部分に拡大して、包含層が部分的に良好な状態で残存することがわかった。文化課・原因者と協議の上、発掘調査範囲を変更し調査を行った。

本遺跡の基本的な層序は、上位から、耕作土（道路部分の盛土も含む、Ⅰ層）、黒色土（Ⅱａ層）、暗褐色土（Ⅱｂ層）、暗黄褐色土（漸移層：Ⅲ層）、黄褐色粘質土（地山：Ⅳ層）である。遺物は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ層から出土する。本来の遺物包含層はⅡ、Ⅲ層である。



遺 跡 の 位 置

遺構と遺物

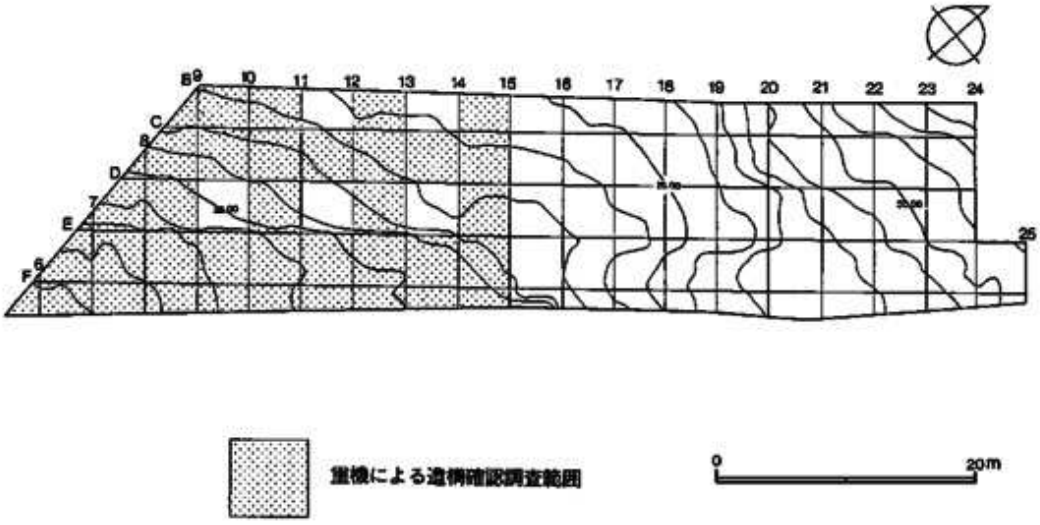
遺構は、検出されなかった。

遺物は、約8,200点出土している。このうち土器は、約5,600点で、主体は、縄文時代中期の北筒式である。同中期の円筒土器上層式、見晴町式、天神山式、柏木川式や大木系の土器、同後期のニセコ式、トリサキ式、大津式、ウサクマイC式、堂林式、同晩期の大洞式等もわずかにある。

石器は約150点で、器種には、石鏃、ポイント・ナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、石斧、たたき石、すり石（北海道式石冠も含む）、石皿（台石）、石核等がある。この他、石屑（U・Rフレイク、フレイク）、礫△（有意の礫）、礫等2,500点ある。

遺跡のほとんどが耕作によって地山まで撹乱されていたため、遺構が検出できなかったが、遺物から、本遺跡は、縄文時代中期から晩期まで細々と営まれたと思われる。

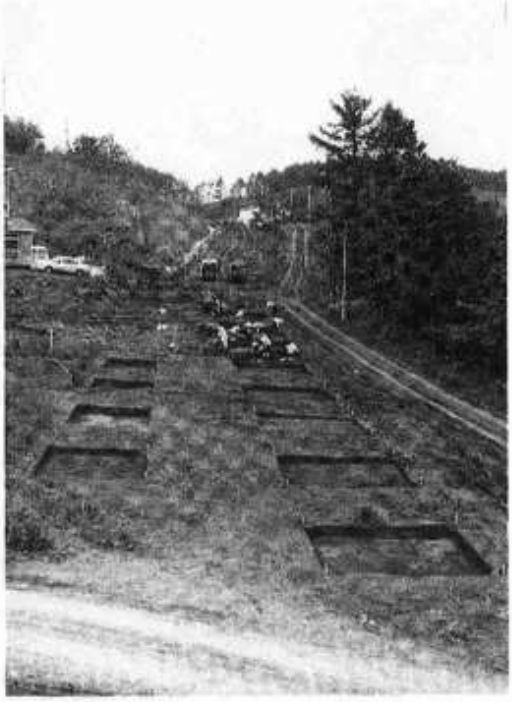
1は見晴町式、2は天神山式、3～5は北筒式である。6・7は石鏃、8・15はポイント・ナイフ、9・10はつまみ付きナイフ、11～14は黒曜石製のスクレイパー、16は石斧、17はたたき石、18・19はすり石（19は北海道式石冠）、20はくぼみ石である。



発掘調査区域

遺 跡 近 景

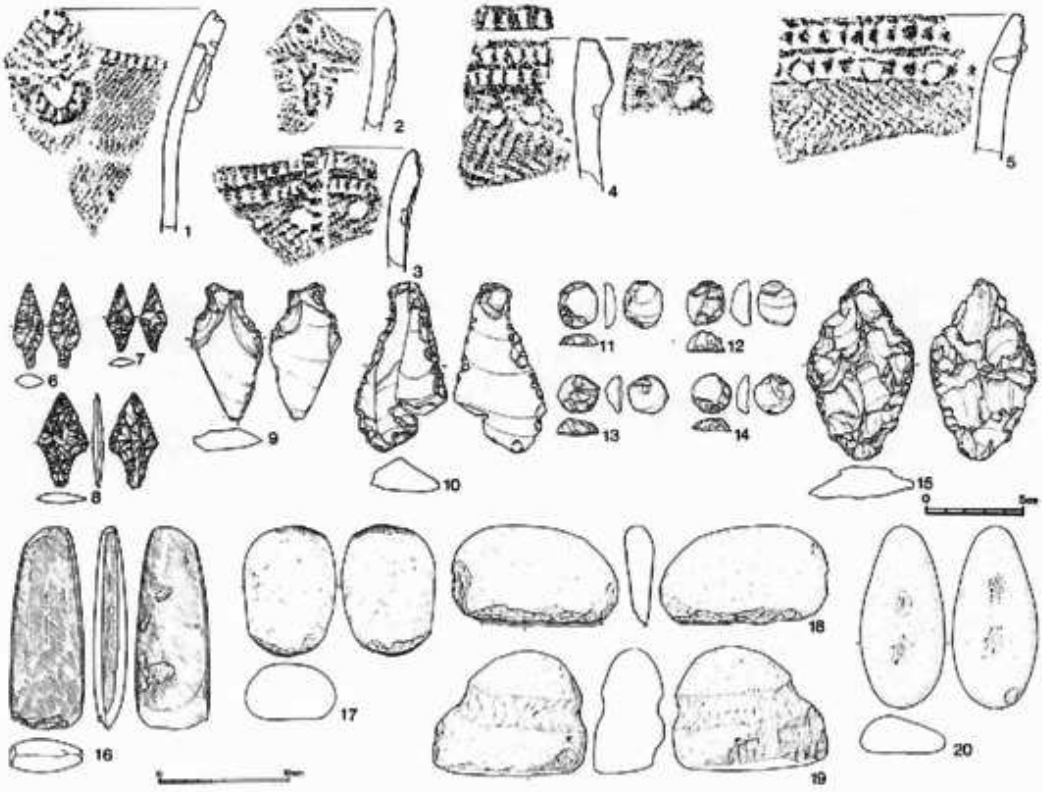
発掘調査状況



発掘調査状況

遺物出土状況

遺物出土状況



登町3遺跡出土遺物

3．研修・研究会等

研修会・研究会参加

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者研修

「埋蔵文化財情報課程」　花岡　正光　　平成元年12月７～21日

「縄文土器調査課程」　遠藤　香澄(予定)　　平成２年１月10～23日

「生物環境課程」　鈴木　信(予定)　　平成２年３月６～23日

北海道考古学会第27回大会シンポジウム(江別市)

「北海道の先土器時代」　　平成元年４月23日

発表者　千葉　英一　新道４遺跡の石器

長沼　孝　桔梗２遺跡出土の石器

埋蔵文化財写真技術者研修会(京都市)　　平成元年７月４・５日

参加者　立川トマス

全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(愛媛県)　　平成元年９月７・８日

参加者　野中　一宏

アイヌ文化専門職員等研修会(札幌市)　　平成元年10月25～27日

参加者　佐川　俊一・田口　尚

南北海道考古学情報交換会(七飯町)　　平成元年12月２・３日

参加者　越田賢一郎・熊谷　仁志・森岡　健治ほか

北海道考古学会発掘調査報告会(札幌市)　　平成元年12月　９日

発表者　西田　茂　深川市納内６丁目付近遺跡

長沼　孝　余市町フゴッペ貝塚

大沼　忠春　千歳市美々８遺跡

展覧会等協力

全国埋蔵文化財法人連絡協議会・全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会・朝日新聞社主催

「日本列島発掘展」

全国各地　　昭和63年８月３日～平成元年８月29日

北海道開拓記念館第78回テーマ展

「掘り出された北の歴史―㈶北海道埋蔵文化財センターの発掘から―」

札幌市　北海道開拓記念館　　平成元年４月８～22日

深川市・深川市教育委員会主催

「北の先史　埋蔵文化財にみる深川の歴史展」

深川市　　平成元年９月９～22日

北海道教育委員会主催第14回道民ホール文化財展

「縄文時代の北海道(2)」

札幌市　道庁道民ホール　　平成2年1月29日～2月3日

部内研修・研究会

発掘調査現地研修会

第一回　「泥炭層について」

深川市納内6丁目付近遺跡　　平成元年6月29・30日

講師　北海道開拓記念館　山田悟郎氏

第二回　「フゴッペ貝塚とその周辺の遺跡」

余市町フゴッペ貝塚　　平成元年10月5・6日

講師　　松下　亘氏

発掘調査報告会

平成元年度遺跡調査報告(スライド使用)　　平成元年11月17日

研修報告会

第一回研修報告会　　平成元年12月19日

第二回研修報告会　　平成2年3月予定

職員研修会

講演「アラブ首長国連邦ラッセルハイマ首長国ジュルファ遺跡の発掘調査に参加して」

講師　北海道教育庁文化課　文化財保護主事　田中哲郎氏

平成元年12月19日

その他

平成元年度文部省科学研究費奨励研究(B)

「北海道における中・近世考古学の研究」　　越田賢一郎

4．刊行報告書

昭和63年度刊行

第53集　小樽市　忍路土場遺跡・忍路５遺跡　―北後志東部地区広域営農団地農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―

第54集　江別市　西野幌12遺跡　―道立野幌総合運動公園用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―

第55集　深川市　納内６丁目付近遺跡　―北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書―

第56集　深川市　国見２遺跡　―北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書―

第57集　深川市　東広里遺跡　―音江築堤工事内埋蔵文化財発掘調査報告書―

第58集　美沢川流域の遺跡群 XII　―新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―

第59集　今金町　美利河１・２砂金採掘跡　―後志利別川水系美利河ダム建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―

第60集　深川市　納内３遺跡　―北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成元年度刊行予定

第61集　伊達市　牛舎川右岸遺跡・稀府川遺跡

第62集　美沢川流域の遺跡群　XIII

第63集　深川市　納内６丁目付近遺跡（２）

第64集　伊達市　谷藤川右岸遺跡

第65集　仁木町　モンガク丘陵の遺跡群

第66集　余市町　栄町５遺跡

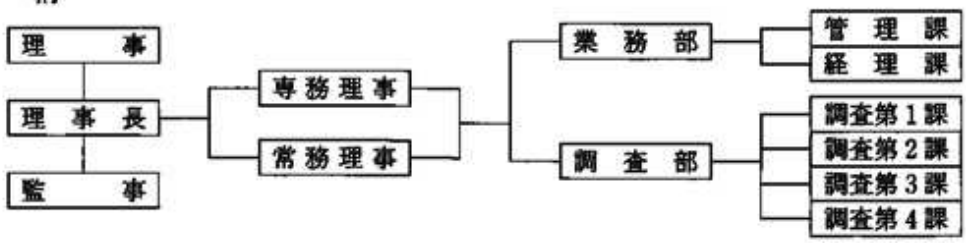
第67集　余市町　登町2・3遺跡

5. 組織と機構

役員

理事長	澤　宣彦	北海道教育委員会教育長
専務理事	永田春男	
常務理事	竹田輝雄	北海道教育庁生涯学習部文化課主幹
理事	今井道雄	北海道文化財保護協会会長
理事	高倉新一郎	北海道文化財保護審議会委員
理事	大場利夫	
理事	峯山　巌	北海道文化財保護協会副会長
理事	藤本英夫	北海道文化財研究所長
理事	寺山敏保	北海道企画振興部長
理事	岩原英志	北海道教育庁企画管理部長
理事	前田利明	北海道教育庁生涯学習部長
監事	田上吉也	北海道国際文化協会会長
監事	上田　實	北海道副出納長兼出納局長

機構



職員一覧

業務部

職	氏名	所属
業務部長	○伊藤庄吉	
管理課長	○菅原俊紀	管理
主事	葛西宏昭	〃
嘱託	穂坂惣次郎	〃
〃	金田真一	〃
〃	瑳田千秋	〃
経理課長	○宮下芳美	経理
主任	菅野聡	〃
〃	吉田貴和子	〃
嘱託	重平洵	〃
〃	寺久保喬一	〃

調査部

職	氏名	所属
調査部長	○中村福彦	
調査第1課長	鬼柳彰	第1課
主任	○高橋和樹	〃
〃	三浦正人	〃
〃	和泉田毅	〃
文化財保護主事	野中一宏	〃
〃	○工藤研治	〃
〃	谷島由貴	〃
〃	森岡健治	〃
文化財保護主事	花岡正光	第1課
嘱託	藪中剛司	〃
〃	藤本昌子	〃
調査第2課長	○大沼忠春	第2課
主任	佐藤和雄	〃
〃	遠藤香澄	〃
文化財保護主事	田口尚	〃
嘱託	越田雅司	〃
調査第3課長	○越田賢一郎	第3課
主任	西田茂	〃
〃	佐川俊一	〃
〃	○田才雅彦	〃
〃	立川トマス	〃
文化財保護主事	葛西智義	〃
嘱託	皆川洋一	〃
嘱託	*工藤義衛	〃
調査第4課長	○千葉英一	第4課
主任	○長沼孝	〃
〃	熊谷仁志	〃
文化財保護主事	中田裕香	〃
嘱託	鈴木信	〃

○印は派遣(道教委)職員　*印6月30日付退職

II. 設立10周年記念事業

1. 概　　要

昭和54年9月1日に設立された当埋蔵文化財センターは、平成元年に満10年を迎えることとなり、これを記念して下記により式典・講演・祝賀会を実施した。

日　時	11月6日(月)	15時	
会　場	ポールスター札幌	札幌市中央区北4条西6丁目	
式　典	式　辞	理事長	澤　宣彦
	経過報告	専務理事	永田春男
	来賓祝辞	北海道開発局長	山口　甲
	永年勤続者表彰	贈呈者　理事長	澤　宣彦
		永年勤続者	鬼柳　彰
		〃	西田　茂
		〃	佐川俊一
		〃	遠藤香澄
		〃	菅野　聡
講　演	演　題	「日本海文化について」	
	講　師	同志社大学教授	森　浩一
祝賀会	歓迎挨拶	専務理事	永田春男
	来賓祝辞	日本道路公団札幌建設局長	蔵谷来三郎
	乾　杯	全国埋蔵文化財法人連絡協議会副会長	坪井清足
	祝　宴		
	乾　杯	理　事	大場利夫

このほかに記念事業の一環として、過去10年間の調査の成果をA4判94ページにまとめた遺跡・遺構・遺物の写真集「北海道の遺跡」を刊行し、また、昭和61年に千歳市ママチ遺跡から出土した土製仮面を意匠化した文鎮を作成した。

<記念講演>

『日本海文化について』（要旨）

同志社大学教授　森　浩一

私が北海道へ初めて来たのは昭和30年で、積丹半島の照岸洞窟（泊村）を同志社大学の酒詰仲男先生の指導のもとに発掘しました。そのあと、瞿戸で旧石器の資料を表採して帰りましたが、一部は現在、京都国立博物館に陳列されています。

配布しました資料については、日本海シンポジウムがどのように広がっていったか、またこれに関する出版物にはどんなものがあるかを書いたものです。聞くところによりますと、これらの出版物は、中国や朝鮮などで大変重要視されているということです。

さて、考古学の発掘は現在１万から１万５千件位行われているようですが、私の学生時代(昭和25、26年頃)は300件ぐらいで、極く小規模なものでした。最近、新聞などで注目される、あるいは学界の定説を覆すような発掘がずいぶん多い。そのうちの代表的なものを二つ取り上げると、一つは佐賀県の吉野ケ里遺跡であり、もう一つは奈良県の藤ノ木古墳であります。

吉野ケ里の場合は現在、高い望楼も何軒か復元され、大きな倉庫群も復元されて、見学も許されています。４月からの見学者が百数十万人を超えたということです。この吉野ケ里の教訓は、遺跡を開発の邪魔だと言っている時代は過ぎたということです。佐賀県にとっては大きな観光資源となりましたが、そればかりでなく、全国に誇れるこんなに大きくてすばらしい遺跡があったということで県民に勇気を与えました。考古学は、地域に勇気を与える学問なのです。

その吉野ケ里遺跡ですが、有明海に面したところにありますので、一見すると日本海沿岸とは何の関係もないようにみえますが、実は遺跡近くの神埼という所に櫛田神社というのがありまして、ここに出雲神話に出てくるクシナダ姫やスサノオノミコトを祀ってあるのです。そのように見ていきますと、最近、島根県の荒神谷遺跡から弥生時代の銅剣358本、銅鉾16本が発見されました。このうちの16本の銅鉾は太陽に照らしますと特異な輝きのある綾杉文状の研ぎ出しで、これは従来、吉野ケ里周辺に集中して発見されていたものです。ですから荒神谷で発見された青銅器も、有明海沿岸で造られたか、あるいは工人が移って造ったか、これらは今後の研究課題ですが、いずれにしても相互に密接な関係があります。

藤ノ木古墳から出た、金めっきの金銅製冠や沓が目についていると思いますが、実は支配者たちが冠を着けるという風習は、―起源は中央アジアや朝鮮ですが、日本では福井県の二本松山古墳から出たものが一番古く、ほかでは、鳥取、島根、富山などから出ている―日本海沿岸の、いずれも港を見下すような所にあります。藤ノ木古墳から出たものは地域は畿内ですが、その源流が日本海側にあるということです。

私が古代日本海シンポジウムを始めた動機は、裏日本という、他人に劣等感を与えるようなことばが嫌であったからです。表日本ということばの成立ちを考えてみますと、これは江戸時代の後半にペリーが浦賀に来航して、太平洋側がアメリカ外交の中心となってからです。それから太平洋戦争の終結にあたって、東京湾のアメリカ軍艦上で仮調印が行われるということもありました。つまり、表日本・裏日本ということばは、アメリカとの関係でおこる、ここ百年間の出来事なんです。長い日本の歴史の中では、考古学的事実から言っても、日本海側は数万年の歴史を持っています。したがって、表日本・裏日本ということばは適切でないし、使わないほうがよい。最近、私たちの主張が影響したのかNHKなどのマスコミでも、表日本・裏日本ということばを使わなくなっているし、中央・地方などという言い方にも気をつけているようです。

遺跡の成果というものを、もっともっと地域の活性化に役立てるべきです。

この10年間の発掘では、福井県の鳥浜貝塚をはずして考えることはできません。この遺跡からは、他の遺跡では見られない木製品などが、たくさん発見されている、つまり縄文文化とは本当はこんな文化だったということを示してくれたのです。漆の器もたくさん出ています。百科大辞典なんかには、漆の技術はある時代に中国から入ってきたと書いてあります。ところが、今のところ日本で発見されているものが世界で一番古いのです。それから鳥浜もそうですが、漆器の出る遺跡からエゴマの粒がよく発見されています。奈良時代の古文書によりますと、漆器の作り方が書いてあって、漆液4～3に対して約1の割合で荏の油を使えと書いてある。また、平安時代の延喜式にも1/3～1/4の、荏の油を使うと書いてある。このようなことから考えて、縄文時代人は漆液を採取し、それに混和剤としてエゴマの油を使うという技術を知っていた。これは大変な知恵と技術だと思います。

そのような意味で縄の存在も重要であります。日本海を自由に航海するためには、さまざまな太さの縄や編物が必要であったと思いますが、鳥浜からはそれらの縄が出ている。ただ現在と違うのは、材質が当時のものは大麻で作られていたということです。しかもこれらの大麻は自然から採取したものではなく、栽培していたもののようです。

金沢市のチカモリ遺跡からは、直径80 cmの柱(奈良の大仏殿で太いものが80 cm位、法隆寺の金堂の柱で50 cm位)が発見されています。ただ、全体でどのような構築物を形作っていたのかは分からないのですが、巨木をコントロールするような、きわめて高度な木の文化が存在したことは確かです。これらの巨木は約300本位出ていますが、すべてクリ材です。鉄道の枕木などに使われたきわめて堅い木ですが、切口に近いところに穴（目途穴）を開けている。これは、遠隔地から運搬するために使用したものです。従来、目途穴は奈良（律令）時代から出現するものと考えられていましたので、今回の発見は驚嘆に値するものでした。

能登の真脇遺跡からも巨木が出ています。特に注目されるのは、イルカの骨が数百頭分出土していることです。江戸時代には、ここが幕府の天領となっていました。現在でも真脇の神社へ行きますと、イルカの網元が奉納した絵馬が飾られている。イルカの油を売って利益をあげ

ていたのです（肉は子供のおやつくらいで商品価値はない）。

最近は科学技術が進歩していて、土器などに付着しているタール状の物質を分析する方法があります。残存脂肪酸分析と言いますが、真脇遺跡のものを分析した結果、イルカの油であることが判明しました。

このように日本海沿岸は、それぞれの地域の特産物を売ることで繁栄してきたのです。

巨木文化については、出雲神社の神殿に名ごりをみることができます。現在は24ｍの高さの柱ですが、中世には48ｍあったといわれています。平安時代にはその倍の96ｍであったともいわれていますが、さすがにこれは疑わしいとする見方もあります。

日本海沿岸にはこれらの遺跡のほかにも、北海道小樽市の忍路土場遺跡や新潟県青海町の寺地遺跡などからも巨大な柱が出ていますので、やはり巨木文化の遺跡としていいと思います。

国内には黒曜石の原産地として、島根県の隠岐諸島、佐賀県伊万里の腰岳、伊豆諸島の神津島、北海道の赤井川、白滝、置戸、十勝三股などがあります。今日、蛍光X線分析法によって、黒曜石の原産地を推定することができるようになっています。この方法による分析の結果、腰岳のものは沖縄、朝鮮半島、東シナ海方面に運ばれていることは分かっています。東シナ海方面のルートはちょうど遣隋使、遣唐使のルートとほぼ同じであります。従ってこのルートは有史以前から開かれていたということになります。

神津島のものは、２万４千年前から弥生時代まで関東方面に運ばれていた。隠岐のものは島浜や日本海沿岸に運ばれていますし、北海道のものは東北地方に運ばれていました。また、沿海州の遺跡から出土した黒曜石の破片100点を立教大学の鈴木教授が分析したところ、10点は隠岐産のもの、20点は北海道産のもの、という結果が出ています。

沿海州へのルートは幕末の探検家、間宮林蔵のルートと同一のものであり、リレー式に物が運ばれたと思われます。

日本海沿岸の舟は、その土地土地の商品―大麻の縄、漆器、イルカの油、黒曜石、アスファルト（秋田県昭和町槻ノ木遺跡）―などを運び、繁栄してきたと思われます。これに対して、太平洋側は波が荒く、特に関東・東北の沖合は通りにくい。このほか、北部九州の弥生土器が隠岐の沖の海底から発見されています。これなども日本海沿岸の物の動きを示すものとして興味深いものです。

最近、もっと驚く発見がありました。私は戦後の十大発掘の一つに入る貴重な発見と考えていますが、それは伊達市有珠10遺跡の南海産の貝輪です。

実はこれに似た貝輪は北部九州弥生人の墓から、中国製の銅製鏡、武器や玉とともに発見されています。この貝は沖縄本島周辺から産出したもので、イモガイ、ゴホウラである。一般にイモガイは女性、ゴホウラは男性に用いられています。

私は、墓の中に中国製の銅製品と土着の貝輪を合わせもつ、このバランス感覚がとてもおもしろいと思う。中国の進んだ文化を取り入れる一方で、体力の限界まで潜って採った天然の貝を珍重するという、そのように自然のものを最大限に活用する当時の倭人たちを、中国の人た

ちは、我国（中国）には失われてしまった礼を、厚く重んじる人たちだと尊敬の念で見ていたようです。

これらの貝は従来、北部九州、島根、瀬戸内海あたりまで運ばれていたことが遺跡の発掘からわかっていました。産出地については種子島、奄見大島近海ではないかという意見もあったが、素潜りの限界を越える深さのところにしか棲息しないこと、沖縄本島から弥生時代のイモガイ、ゴホウラの商品を集めた遺跡が約20カ所発見されているなど、沖縄本島近海産であることは動かない。弥生時代の北部九州の土器や米作りが短期間のうちに、本州最北の青森県まで伝播したのは、まさに日本海ルートによるものであり、有珠10遺跡の貝輪も同じルートでリレー式に運ばれたと思われます。

ところで、有珠10遺跡発見の人骨はいかなる特徴を持っているのか、札幌医科大学の百々先生から現時点での見解を今日伺ってきたのですが、大陸からの渡来人ではない、多分縄文人の伝統を受け継いだ人たちではないかということですが、私もそうなるんではないかと考えておりますし、ひょっとすると北部九州の海岸部の人が動いてきているのではないかと思うのです。あの貝輪にそっくりなものは、佐世保の沖合の小島、宮の本遺跡から出ていて、一緒に並べると区別がつかない程似ています。

次に潟のことですが、日本海側には唐津、博多、富山(放生津、氷見)、石川、青森の十三湖など実に多くの潟がある。ただ北海道は、日本海のものははっきりしませんが、オホーツクのサロマ湖がそうです。

日本海沿岸は縄文時代、弥生時代、奈良時代頃まで潟周辺は文化の中心であったが、江戸時代になって米作りのため埋めてしまいましたし、特に戦後の食料難の時代に、大規模な埋め立てが行われて本来の機能を失ったが、現在残っているのは、放生津潟が富山新港として使われている位です。

また、恵庭出土の和銅開珎の銀銭ですが、同じものはこれまで渤海の都や唐の都長安から出土している。中国では、国内で銅銭を使用するが、外国から持って来る場合、金銀銭を使う。そういう意味で恵庭から銀銭が出たということは、北海道が中国との交易を重視した場所だったのではないかと思うのです。同じような例で、最近釧路から湖州鏡が発見されましたが、これは江南地方で作られた鏡が日本海ルートでもたらされたものでしょう。

また、平安時代末から鎌倉時代にかけての星兜、これの一番出土例の多いのは北海道です。なぜ北海道が一番多いのか、私は以前から注目していました。つまり、平安、鎌倉時代の記録では北海道は十分描けないのです。しかし考古学の遺物で言えば北海道の古代史、中世史は生き生きと描けるのです。これまで北海道は田舎だという観念があって、事実を歪めてきたのです。たとえば阿部比羅夫が奈良時代より少し前（7世紀）に、日本海を北上し、蝦夷、粛慎の人たちと接触している。最近では余市湾あたりでないかと言われています。

フゴッペ洞窟の入口から出た墓に6世紀頃の一本の鉄刀が副葬されていた。この鉄刀は島根県の岡田山古墳などから出る円頭大刀と非常によく似ています。だからひょっとすると阿部比

羅夫の伝承の頃、あるいはそれより前にも、日本海を北上した人たちが、粛慎と接触、交易するために余市湾のあたりへかなり定期的に来ていたのではないか。教科書では阿部比羅夫の征討などと書かれているが、日本書紀をよく読むと戦争は1回しかしていない。あれは戦争ではなく交易の利権あるいは渤をおさえるためにやって来たのではないかと思います。

それでは粛慎とは一体なんだろうか。平泉の中尊寺を建立するに当たり、藤原清衡が願文の中で「中尊寺を作ることによって東北地方が治ったら、粛慎、挹婁の民もヒマワリがなびくように、こちらを向くであろう。」と述べている。また、仙台の多賀城にある碑文に「都を去る1,500里……靺鞨国の界を去る3,000里」と書いてある。したがって当時の東北地方の人たちは、自分たちの北の隣には粛慎、挹婁の民が住んでいるんだということを熟知していた。今後北海道の古代史を考える場合、間宮林蔵のコースというのは十分注目しなければなりません。

最後に続縄文文化という名称についてですが、あれは文化の内容が縄文時代のままだということで付けられたのだと思いますが、前にも述べましたように、北海道には弥生文化の要素が沢山入ってきているわけですから、そろそろその時代を代表させる遺跡の名称に変更したらよいと思う。弥生文化でも、東京都の弥生町遺跡の名によっているのですから。

北海道には日本書紀や古事記はないのですから、遺跡研究の成果をそれに代わるものとして十分ご活用なさるようお願いして話を終ります。

日本海文化シンポジウムに関する文献

森　浩一編『シンポジウム古代日本海文化』　小学館　1983年

森　浩一編『シンポジウム古代の日本海諸地域』　小学館　1984年

森　浩一編『シンポジウム東アジアと日本海文化』　小学館　1984年

森　浩一・門脇禎二他『古代日本文化の源流と発達』　大和書房　1985年

森　浩一編『日本海文化シンポジウム味噌・醤油・酒の来た道』　小学館　1987年

森　浩一編『シンポジウム古代翡翠文化の謎』　新人物往来社　1988年

森　浩一編『考古学随想　考えたり怒ったり』　社会思想社　1988年

浅香　年木『浅香年木遺稿集　第2集　茜さす日本文化―北陸古代ロマン再構築―』　1989年

森　浩一編『古代日本海域の謎Ⅰ―住まいからみた人と神の生活―』　新人物往来社　1989年

森　浩一編『古代日本海域の謎Ⅱ―海からみた衣と装いの文化―』　新人物往来社　1989年

森　浩一編「日本海文化の再発見」『NHK文化講演会』　NHK編　1988年

日本海文化研究の広がり

開催年	シンポジウム名	主催	開催地
1980	古代日本海文化をめぐって	東アジアの古代文化を考える大阪の会	大阪市
1981	古代日本海文化をめぐって (2)	東アジアの古代文化を考える大阪の会	大阪市
1981	日本海文化をめぐる問題提起 (日本海文化を考えるシンポジウム)	日本海シンポジュウム実行委員会	富山市
1982	日本海諸地域の古代文化と交流 (日本海文化を考えるシンポジウム)	日本海シンポジュウム実行委員会	富山市
1983	東アジア世界と日本海文化 (日本海文化を考えるシンポジウム)	日本海シンポジュウム実行委員会	富山市
1984	日本海沿岸における都市文化と交流 (環日本海(東海)金沢国際シンポジウム)	(社)北陸経済調査会 環日本海(東海)金沢国際シンポジウム実行委員会	金沢市
1986	ヒスイの謎 その輝き 今 (翡翠と日本文化を考えるシンポジウム)	翡翠と日本文化を考えるシンポジウム実行委員会	糸魚川市 青海町
1986	食文化—創造と伝統— (日本海文化を考えるシンポジウム)	日本海シンポジュウム実行委員会	富山市
1987	住文化—人と神の生活— (日本海文化を考えるシンポジウム)	日本海シンポジュウム実行委員会	富山市
1988	ヒスイは語る 越の大地に (翡翠と日本文化を考えるシンポジウム)	翡翠と日本文化を考えるシンポジウム実行委員会	糸魚川市 青海町
1988	古代の飛騨—その先進性を問う— (飛騨国府シンポジウム)	岐阜県吉城郡国府町	国府町
1988	衣と装いの文化—知恵と技術— (日本海文化を考えるシンポジウム)	日本海シンポジュウム実行委員会	富山市
1989	古代環日本海文化の交流 (北の海道秋田国際シンポジウム)	秋田市・秋田市の文化を育てる市民の会	秋田市

理事長式辞

永年勤続者表彰

記念講演

講師　同志社大学　森　浩一教授

祝賀会歓迎挨拶

調 査 年 報 2

平成元年度

平成元年12月28日発行

編集・発行　財団法人北海道埋蔵文化財センター
札幌市中央区南26条西11丁目
TEL (011) 561−3131
印　　刷　興国印刷株式会社
札幌市西区西町南13丁目
TEL (011) 661−2221